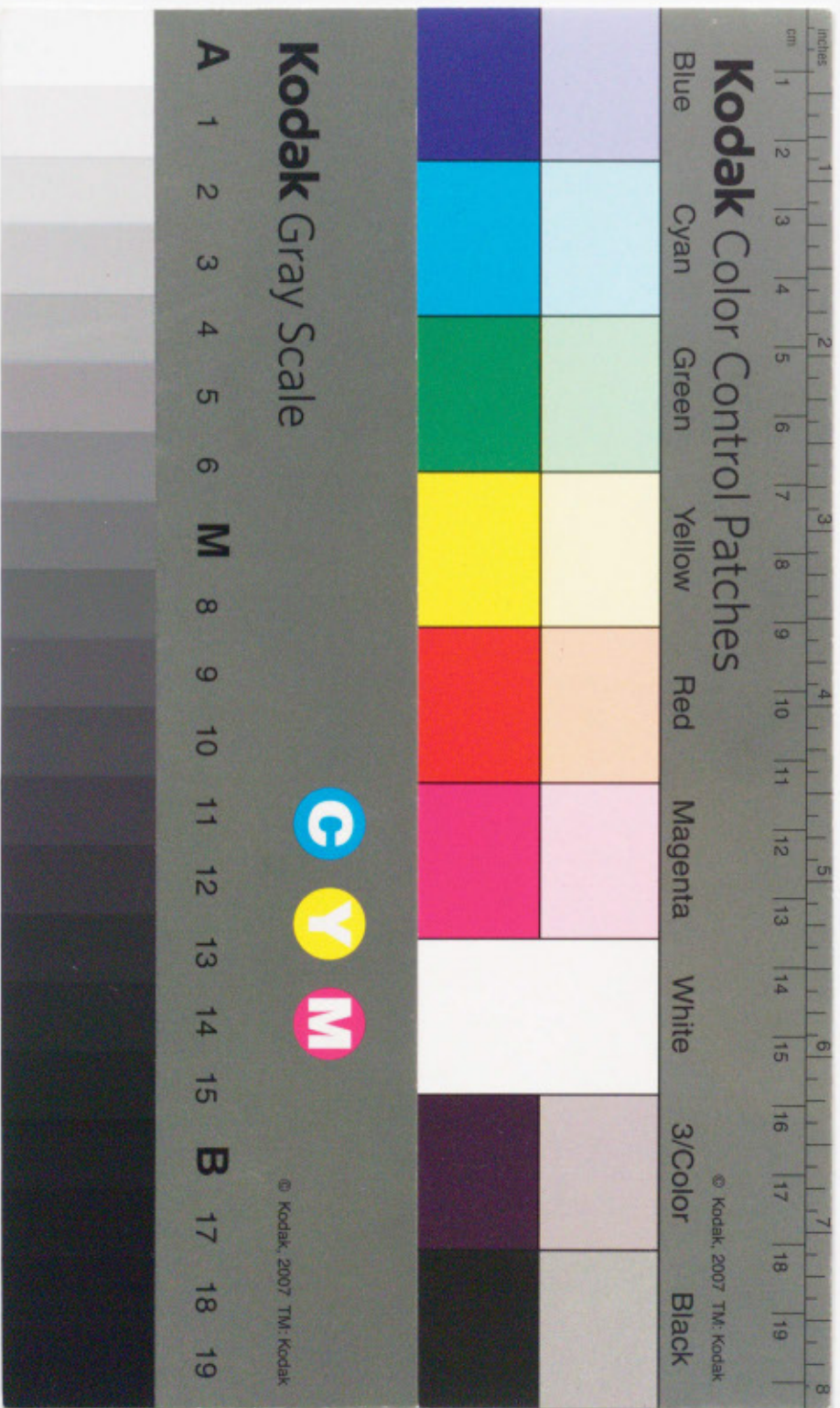


各務原市資料調査報告書第4号

美濃須衛古窯跡群資料調査報告書

昭和59年3月

各務原市教育委員会



美濃須衛古窯跡群資料調査報告書

序

各務原市内には 200 か所を越える原始・古代の遺跡が知られていますが、中でも北部の各務原山地一帯の山麓には、古代から中世にわたる一大窯業生産の中心地であった「美濃須衛古窯跡群」と呼ばれている窯業生産遺跡が広く分布しています。

しかしこの美濃須衛古窯跡群については、最近まで発掘調査される例も少なくその大部分が未知のままでしたが、昭和58年3月に刊行された『各務原市史』考古巻によって、稲田山古窯跡群・地獄洞古窯跡・松田古窯跡群・尾崎大平古窯跡群等の発掘成果や、その他18か所の古窯跡群の分布状況と採集遺物の詳細が明らかにされ、各務原市域における美濃須衛古窯跡群のその全体像がようやく把握されてきました。

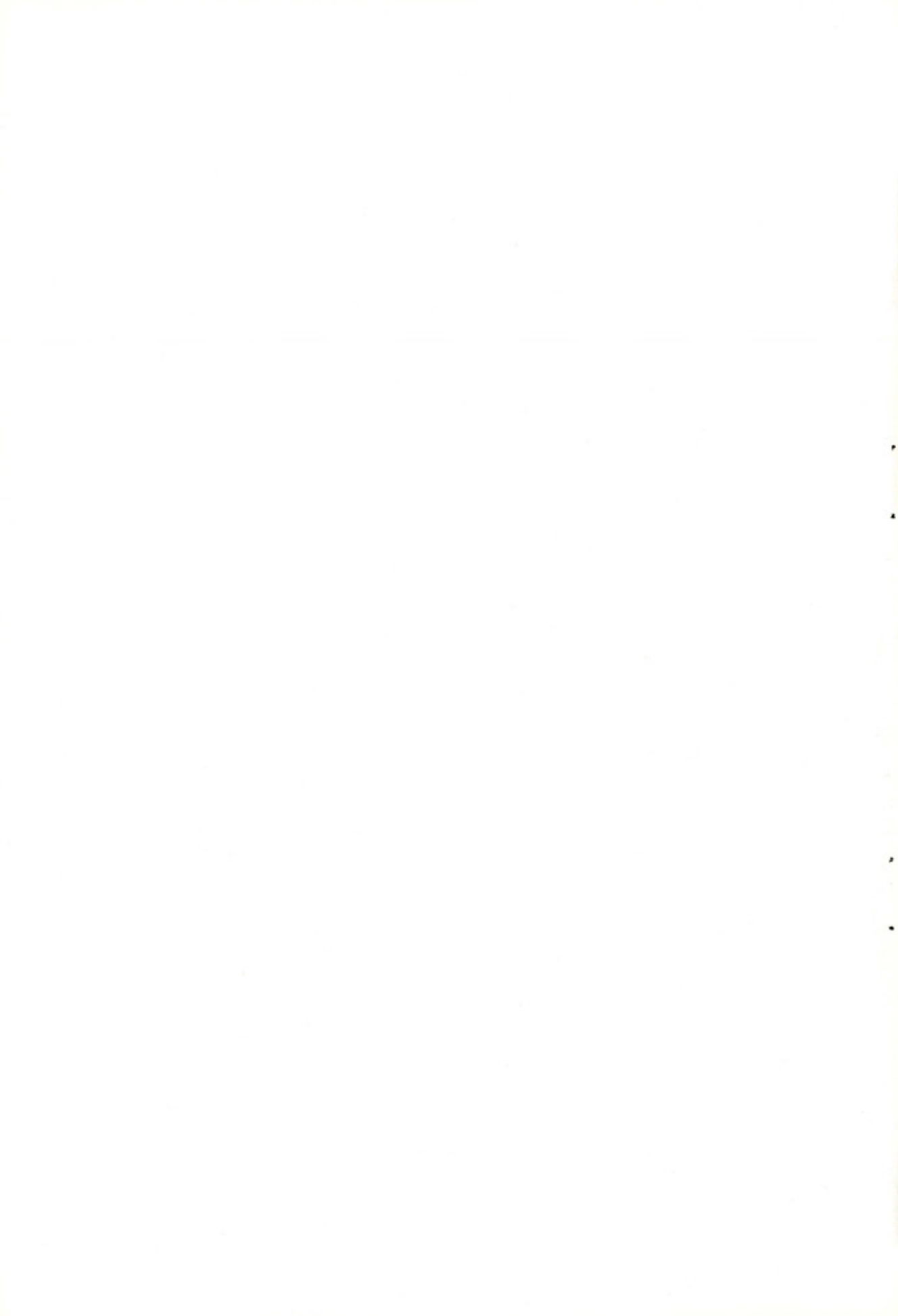
先の『各務原市史』考古巻が、美濃須衛古窯跡群研究の資料として多方面から活用されており、今後とも調査の継続の必要性が痛感されましたので、考古巻刊行後新しく発見された資料と、土川修平氏の踏査資料をもとに、美濃須衛古窯跡群の分布図と、美濃須衛の編年を試みしました。『各務原市史』考古巻の古窯跡関係の補遺ともいうべきものです。本報告書が前書とともに美濃須衛古窯跡群研究の一助となれば、望外の喜びであります。

末尾ではありますが、本調査報告書を刊行するにあたり、関係各位の御努力に、その労苦を謝するとともに、ここに深甚なる感謝を申し上げる次第であります。

昭和59年3月22日

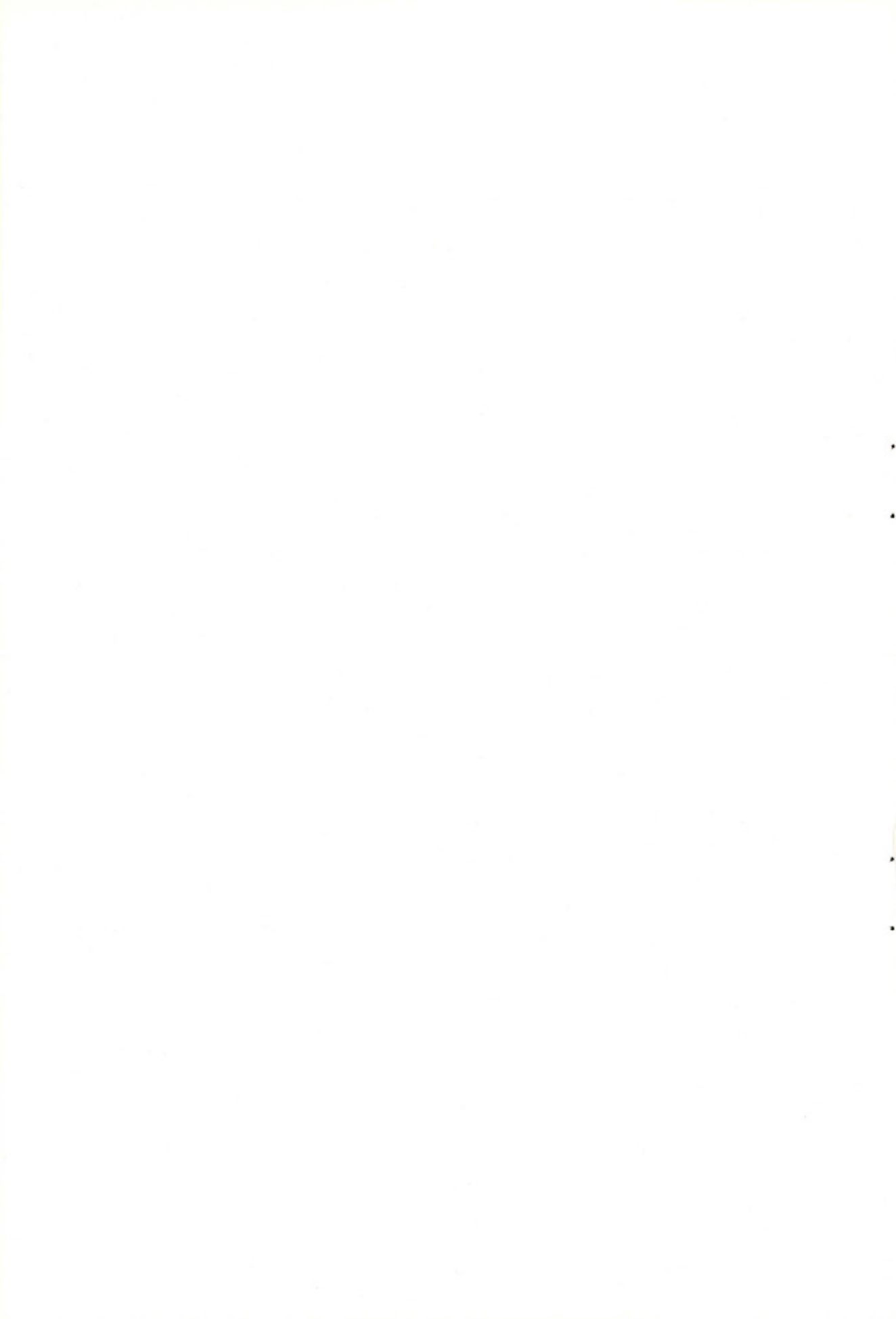
各務原市教育委員会

教育長 水野定之



例 言

1. 本書は、各務原市域における美濃須衛古窯跡群の資料調査報告書である。
2. 本書は、昭和48年に土川修平氏によって行われた美濃須衛古窯跡群分布調査において採集された資料を中心に、昭和58年3月に刊行された『各務原市史』（考古・民俗編 考古）の資料調査以後、新たに発見・収集された資料をあわせて収録した。なお、各務原市域の美濃須衛古窯跡群の詳細については、本書と、『各務原市史』（考古・民俗編 考古）をあわせて参照していただきたい。
3. 本書に収録した遺物の実測・トレース・遺物写真撮影・図版作成および本文の執筆は社会教育課嘱託渡辺博人が行い、付表の作成・編集・校正等は社会教育課市史編集係長齋藤文彦、同主事後藤光伸・上村忠宏、同嘱託川原田京子・星野文子が行った。
4. 本書の執筆から刊行にいたるまでには、次の各氏より多くの御指導・御協力をいただいた。
波多野寿勝・大江命・土川修平・永井八郎・増田五郎・菅原謙・小沢一弘・酒井清治・後藤建一（敬称略）
5. 本書に収録された資料は、すべて各務原市教育委員会に保管されている。



目 次

序
例言

I 出土遺物の解説

| | | |
|---|--|----|
| 1 | 鶴沼地区の出土遺物 | 1 |
| | (1)鶴沼6号窯 (2)鶴沼8号窯 | |
| 2 | 各務地区の出土遺物 | 4 |
| | (1)各務1号窯 (2)各務2号窯 (3)各務3号窯 (4)各務4号窯 (5)各務5号窯 (6)各務6号窯 (7)各務7号窯 | |
| 3 | 須衛地区の出土遺物 | 7 |
| | (1)須衛1号窯 (2)須衛2号窯 (3)須衛3号窯 (4)須衛4号窯 (5)須衛5号窯 (6)須衛6号窯 (7)須衛7号窯 (8)須衛8号窯 (9)須衛9号窯 (10)須衛10号窯 (11)須衛11号窯 (12)須衛12号窯 (13)須衛18号窯 (14)須衛19号窯 (15)須衛20号窯 (16)須衛21号窯 (17)須衛22号窯 (18)須衛23号窯 (19)須衛25号窯 (20)須衛26号窯 (21)須衛27号窯 (22)須衛29～32号窯(23)須衛33号窯 (24)須衛34号窯 (25)須衛35号窯 (26)須衛36号窯 (27)須衛37号窯 (28)須衛38号窯 (29)須衛40号窯 (30)須衛41号窯 (31)須衛42号窯 (32)須衛43号窯 (33)須衛42～49号窯 (34)須衛50号窯 (35)須衛51 号窯 (36)須衛53号窯 (37)須衛59号窯 (38)須衛62号窯 (39)須衛63号窯 (40)須 衛65号窯 (41)須衛21～25号窯周辺採集 | |
| 4 | 蘇原地区の出土遺物 | 29 |
| | (1)蘇原1号窯 (2)蘇原2号窯 (3)蘇原6号窯 | |
| 5 | 那加地区の出土遺物 | 31 |
| | (1)那加2号窯 (2)那加3号窯 | |
| | 表1 美濃須衛古窯跡群分布調査表 | 33 |

II 美濃須衛古窯跡群における須恵器編年

| | | |
|------|-------------------------------|----|
| 1 | はじめに | 39 |
| 2 | 編年における時期の設定 | 41 |
| 3 | まとめ | 54 |
| 付表 1 | 『各務原市史』(考古・民俗編 考古)所収の美濃須衛古窯跡群 | 60 |
| 付表 2 | 美濃須衛古窯跡群関係文献目録 | 62 |

図版

付図 美濃須衛古窯跡群出土須恵器編年表

图 版 目 次

- 1 美濃須衛古窯跡群区分图
 - 2 鶉沼地区窯跡分布图(1)
 - 3 鶉沼地区窯跡分布图(2)
 - 4 各務地区窯跡分布图
 - 5 須衛地区窯跡分布图
 - 6 蘇原地区窯跡分布图
 - 7 那加地区窯跡分布图
 - 8 鶉沼6号窯, 鶉沼8号窯出土遺物実測图
 - 9 鶉沼8号窯出土遺物実測图
 - 10 各務1号窯, 各務2号窯, 各務3号窯, 各務4号窯出土遺物実測图
 - 11 各務5号窯, 各務6号窯, 各務7号窯, 須衛1号窯出土遺物実測图
 - 12 須衛1号窯, 須衛2号窯出土遺物実測图
 - 13 須衛2号窯, 須衛3号窯, 須衛4号窯, 須衛5号窯出土遺物実測图
 - 14 須衛6号窯, 須衛7号窯出土遺物実測图
 - 15 須衛7号窯, 須衛8号窯, 須衛9号窯, 須衛10号窯出土遺物実測图
 - 16 須衛10号窯出土遺物実測图
 - 17 須衛10号窯出土遺物実測图
 - 18 須衛11号窯, 須衛12号窯, 須衛18号窯出土遺物実測图
 - 19 須衛18号窯, 須衛19号窯, 須衛20号窯出土遺物実測图
 - 20 須衛21号窯出土遺物実測图
 - 21 須衛22号窯出土遺物実測图
 - 22 須衛23号窯, 須衛25号窯, 須衛26号窯, 須衛27号窯, 須衛29~32号窯出土遺物実測图
 - 23 須衛33号窯, 須衛34号窯, 須衛35号窯出土遺物実測图
 - 24 須衛36号窯, 須衛37号窯, 須衛38号窯, 須衛40号窯, 須衛41号窯出土遺物実測图
 - 25 須衛42号窯, 須衛43号窯, 須衛42~49号窯, 須衛50号窯, 須衛51号窯, 須衛53号窯出土遺物実測图
 - 26 須衛59号窯, 須衛62号窯出土遺物実測图
 - 27 須衛63号窯, 須衛65号窯出土遺物実測图
 - 28 須衛21~25号窯付近, 蘇原1号窯, 蘇原2号窯出土遺物実測图
 - 29 蘇原2号窯, 蘇原6号窯, 那加2号窯, 那加3号窯出土遺物実測图
- 写真图版
- 30 鶉沼6号窯, 鶉沼8号窯出土遺物
 - 31 鶉沼8号窯出土遺物

- 32 鷓沼 8 号窯出土遺物
- 33 鷓沼 8 号窯, 各務 2 号窯出土遺物
- 34 各務 3 号窯, 各務 6 号窯出土遺物
- 35 各務 7 号窯, 須衛 1 号窯出土遺物
- 36 須衛 1 号窯, 須衛 2 号窯出土遺物
- 37 須衛 2 号窯出土遺物
- 38 須衛 2 号窯, 須衛 3 号窯出土遺物
- 39 須衛 4 号窯, 須衛 6 号窯, 須衛 7 号窯出土遺物
- 40 須衛 7 号窯, 須衛 8 号窯, 須衛 9 号窯出土遺物
- 41 須衛 10 号窯出土遺物
- 42 須衛 11 号窯出土遺物
- 43 須衛 12 号窯, 須衛 18 号窯出土遺物
- 44 須衛 18 号窯, 須衛 20 号窯出土遺物
- 45 須衛 22 号窯出土遺物
- 46 須衛 22 号窯, 須衛 23 号窯, 須衛 27 号窯, 須衛 36 号窯出土遺物
- 47 須衛 37 号窯, 須衛 38 号窯, 須衛 41 号窯出土遺物
- 48 須衛 42 号窯, 須衛 50 号窯, 須衛 62 号窯出土遺物
- 49 須衛 65 号窯出土遺物
- 50 須衛 65 号窯, 須衛 21~25 号窯付近出土遺物
- 51 蘇原 2 号窯, 蘇原 6 号窯出土遺物
- 52 蘇原 6 号窯出土遺物
- 53 蘇原 6 号窯, 那加 2 号窯, 那加 3 号窯出土遺物

I 出土遺物の解説

1. 鶉沼地区の出土遺物

(1) 鶉沼6号窯出土遺物 (図版8-1~3, 図版30-1)

無台坏身 (図版8-1, 図版30-1)

底部は、中央部で器肉を減じ、周辺部はふくらみをみせる。体部は、底部より丸味をおびてたちあがり、口縁部にいたる。全体に厚手のつくりである。底部外面には木口状工具による不整なナデ調整が施され、口縁部外面には、強いヨコナデ痕がみられる。口縁部径13.2cm、底部径6.5cm、器高3.9cmを測る。口径にくらべて器高が低いのは、底部から直接体部がたちあがるのではなく、実測図断面にみられるように、体部の最下段にあたる粘土紐が底部の延長上に位置してゆるやかに体部に移行しているためである。

壺 (図版8-2)

やや撫肩の肩部から頸部は強く外反してたちあがり、口縁部は直立する。口唇部は凹面をなし、内側端部をつまみあげる。肩部外面には叩痕、内面には当具痕が残る。

甕 (図版8-3)

口頸部は上部で外反し、端部はかすかに内傾している。口頸部外面には粗雑な波状文を現存部2段に施し、口縁端部外面には、2本の沈線をめぐらす。

※鶉沼6号窯は昭和46年に松田古窯跡群として発掘調査が行われている。詳細については『各務原市史』(考古・民俗編 考古)を参照されたい。

(2) 鶉沼8号窯出土遺物 (図版8-4~20・図版9, 図版30-2~5・図版31・図版32・図版33-1~3)

無台坏身 (図版8-4~11, 図版30-2~4・図版31-1・2)

(図版8-4, 図版30-2)は、ほぼ平らな底部から、体部は外反気味にたちあがり、口縁端部はやや外につきだす。底部外面は渦巻状痕をナデ調整している。口縁部径11.4cm、底部径6.4cm、器高4.3cm。実測図断面に示すように、体部には4段の粘土紐接合痕が認められる。また、内面には自然釉、窯壁片が付着している。(図版8-5, 図版30-3)は、平らな底部から屈折して体部がたちあがり、口縁部は丸くおさめる。口縁部径11.5cm、底部径5.2cm、器高4.1cm。底部外面は、渦巻状痕をナデ調整している。(図版8-6, 図版30-4)は、丸味をおびた底部から、やや反り気味に体部がたちあがり口縁部でさらに屈折して端部を丸くおさめる。口縁部径12.4cm、底部径6.6cm、器高4.5cm。底部内面中央部には3本の指頭によると思われるナデ痕がみられ、底部外面には回転ナデ調整が施されている。(図版8-7)は底部を欠くが、体部は丸味をおびてたちあがり、ゆるやかに口縁部にいたる。口縁部径12.6cm、底部径6.8cm、現高4.1cm。(図版8-8, 図版30-5)は、ほぼ平らな底部から、体部はかすかに外反気味にたちあがり、口縁部でやや肉厚となる。口縁部径12.6cm、底部径5.2cm、器高

4.2cm。底部外面には回転ナデ調整が施されている。(図版8-9)は底部を欠損するが、体部はかすかに外反気味にたちあがり口縁部にいたる。口縁部径12cm、底部径推定 6.6cm、現高 3.5cm。全体に器肉が厚い。(図版8-10, 図版31-1)は、体部上部を欠損するが、丸味のある底部から、体部はやや急にたちあがる。底部外面には不整なヘラケズリ調整が施され、一部に布目の圧痕がみられる。底部径 7 cm、現高 2.8cm。(図版8-11, 図版31-2)は、底部の中央部が平坦面をなし、その周辺部が器肉を減じながらややたちあがりを見せ二次的な底部を形成している。体部はやや急にたちあがり、口縁部にいたる。口縁部径14cm、底部径10cm(中央部 4.8cm)、器高 4 cm。底部外面には渦巻状痕を不整なナデ調整している。

杯蓋(図版8-12~20・図版9-1~6, 図版31-3~8・図版32-1~4)

(図版8-12, 図版31-3)は、なだらかな天井部から口縁部は小さくおりかえされ、端部は鋭い。天井部外面は、中位まで回転ヘラケズリを行う。つまみは器形にくらべてやや大きいが、比較的整ったものである。口縁部径13.6cm、器高 3.3cm。(図版8-13, 図版31-4)は、天井部は直線的に開き、口縁部は端部でやや外反する。つまみは丸味をおびた扁平なものである。天井部外面上位まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径14.6cm、器高 3.3cm。また天井部内面中央に1本の指頭によるナデ痕がみられる。(図版8-14)は、天井部に張りがみられ、口縁部は丸味をおびて鋭さはない。つまみは小さく扁平で、中央部はかすかに突起している。天井部外面には中位まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径15cm、器高 3.1cm。(図版8-15, 図版31-5)は、天井部はなだらかで、口縁部は短く小さい。つまみは扁平で丸味をおびている。天井部外面には中位下まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径15.8cm、器高 3.4cm。(図版8-16, 図版31-6)は、天井部はなだらかで、口縁部は強く内側におりかえされている。つまみは扁平なもので、天井部外面中位まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径15.6cm、器高 3.5cm。

(図版8-17, 図版31-7)は、天井部はロクロ痕が強く残り、やや直線的に開く。口縁部はほぼ垂直におりかえされているが、やや雑な整形である。つまみは扁平で整形も悪く、天井部外面中位まで荒い回転ヘラケズリを行う。口縁部径15.6cm、器高 3.5cm。(図版8-18, 図版31-8)は、天井部上面に張りがみられ、口縁部は断面三角形に近い形でおりにかえされており、整形は悪い。つまみは扁平で、比較的整形は雑である。天井部外面中位まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径15.8cm、器高 3.9cm。(図版8-19, 図版32-1)は、焼成時の歪みがみられるが、天井部はなだらかで、口縁部は丸味をおびて端部をわずかにおりまげている。つまみは扁平で整形は悪い。天井部外面中位下まで回転ヘラケズリを行い、また外面中位には「II」ヘラ記号がみられる。口縁部径15.6cm、器高 3.6cm。(図版8-20)は、天井部は直線的で、口縁部は丸味をおびてわずかにおりまげている。つまみは中央部がわずかに凹み、器形にくらべて小形であるが比較的ととのったつくりである。外面降灰のため整形痕は不明であるが、天井部内面中央には、一本の指頭によるナデ痕がみられる。口縁部径16cm、器高 3.4cm。(図版9-1, 図版32-2)は全体にずんぐりとしたつくりで、天井部には張りがみられ、口縁部は丸味をもっておりまげられている。つまみは大形で扁平である。天井部外面中位まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径16.4cm、器高 4.1cm。(図版9-2, 図版32-3)は、天井部がやや直

線的に開き、口縁部は稜を形成して外に開く。つまみは扁平であるが比較的ととのったつくりである。天井部外面中位下まで回転ヘラケズリを行い。また、天井部外面中位に「 ∞ 」ヘラ記号がみられる。口縁部径16.6cm、器高 3.8cm。(図版9-3)は、天井部下部を欠損する。天井部はほぼ直線的に開き、外面には回転ヘラケズリを施す。つまみはととのった整形である。

(図版9-4, 図版32-4)は、天井部下部を欠損する。焼成時の歪みがみられるが、天井部はほぼ直線的に開き、外面には回転ヘラケズリを行う。つまみはやや鋭さに欠ける。天井部外面に「|」ヘラ記号がみられる。(図版9-5)は、天井部上部を欠損する。口縁部は丸味をおびているが強く内側におりかえされている。天井部外面には、欠損しているが「|」ヘラ記号がみられる。口縁部径15.6cm、現高 1.8cm。(図版9-6)は、天井部頂部を欠損する。天井部はなだらかで、口縁部は垂直におりかえされ、端部は外反する。天井部外面中位下まで回転ヘラケズリを行い、内面中央部は欠損しているが「|」ヘラ記号がみられる。口縁部径20cm、現高 2.7cm。

皿(図版9-7, 図版32-5)

中央部を欠損し、周辺部のみである。ほぼ平らな底部より口縁部は斜めにたちあがり、かすかに内彎気味を呈して端部は丸くおさめる。底部内面は、不整なナデ調整を行い、底部外面中央部寄りには回転ヘラケズリを行う。口縁部径33.6cm、底部径29.4cm、器高 2.3cm。

壺(図版9-8~10, 図版32-6~8)

(図版9-8, 図版32-6)は、胴部下部を欠損する。胴部は器肉が厚く、底部よりたちあがって、中位やや上部で最大に張り出す。肩部はやや丸味をおびてしだいに器肉を減じながら口縁部にいたる。口縁部は外反してたちあがり、端部は横に鋭くつきだす。胴部外面には、肩部直下まで回転ヘラケズリを行い、のちにナデ調整でなめらかな面に仕上げている。口縁部径10.4cm、胴部最大径16.4cm、現高11.5cm。(図版9-9, 図版32-7)は、肩部以下を欠損する。肩部には張りがみられず、口縁部はやや外反し、端部を丸くおさめる。口縁部径10.8cm、胴部最大径15.8cm、現高 6cm。(図版9-10)は、口頸部のみである。ほぼ垂直にたちあがったのち、上部で強く外反し、端部側面はかすかに凹面をなす。口縁部径13cm、現高2.7cm。

甕(図版9-11・16, 図版32-8)

(図版9-11, 図版32-8)は、胴部以下を欠損する。張りのある肩部から、口縁部はゆるやかに外反してたちあがり、端部は内彎して丸くおさめる。口縁部径18cm、現高 5cm。(図版9-16)は、口頸部の破片である。口頸部はゆるやかに外反気味にたちあがり、端部は垂直につきだす。頸部接合部に外面平行叩痕、内面に当具痕が残る。

瓶(図版9-12~14, 図版33-1・2)

(図版9-12, 図版33-1)は、肩部以下を欠損する。口頸部は、かすかに外反気味にたちあがり、上部でさらに強く外反したのち端部が斜め上方につきだす。口縁部径11cm、現高 7cm。

(図版9-13)は、口頸部のみである。口頸部は外反してたちあがり、端部は上方につきだす。口縁部径14cm、現高 5cm。(図版9-14, 図版33-2)は、口頸部のみである。口頸部は外反気味にたちあがり、上部でさらに強く外反し、端部は内彎気味となる。口縁部径19cm、現高6.3cm。

平瓶（図版9-15）

口頸部のみである。ほぼ直線的に開き、端部はかすかに外反し丸くおさめる。口縁部径8cm、現高6.2cm。

円面硯（図版9-17、図版33-3）

台脚部および陸部を欠損する。海部の外縁は外反気味にたちあがり、台脚部との境には2段に成形された凸帯がめぐり、台脚部には、長方形の幅の狭い透孔とヘラ描による沈線が交互に多数配されている。外縁部径24.5cm、現高4.8cm。

2. 各務地区の出土遺物

(1) 各務1号窯出土遺物（図版10-1～3）

有台坏（図版10-1・2）

（図版10-1）は、底部中央部を欠損する。体部は斜め上方にたちあがり、口縁端部を丸くおさめる。高台は貼り付けにより、底部の周辺に位置している。高台端部は強く外側につきだし、底面は凹面となっている。口縁部径13cm、高台部径10.2cm、器高3.4cm。（図版10-2）は、底部中央部を欠損するが、ほぼ平坦な底部から、体部はかすかに内彎気味にたちあがり、口縁部でやや外反する。高台は貼り付けにより、底部の周辺からやや中央寄りにみられ、鋭さはないが底面が凸面をなしてかすかに外に開き気味である。口縁部径14cm、高台部径10.6cm、器高3.7cm。

鉢（図版10-3）

体部下半を欠損する。体部は丸味をおびてたちあがり、口縁部で内彎するが、端部はかすかに反りをみせる。口縁部径12.8cm、現高4.3cm。

(2) 各務2号窯出土遺物（図版10-4～8、図版33-4～6）

無台坏身（図版10-4、図版33-4）

ほぼ平坦な底部から、体部は一旦角度を変えてたちあがってゆく。口縁部はかすかに直立気味となり、丸くおさめる。底部外面には渦巻状痕がみられ、ヘラ起こし痕が中央部に残る。口縁部径11.2cm、底部径5.5cm、器高3.9cm。

蓋（図版10-5）

内側に返りを有する蓋の破片である。外面平坦部には回転ヘラケズリを行い、返り部は細く小さいが非常に鋭い。

甗（図版10-6、図版33-5）

口頸部を欠損する。全体に雑なつくりで、丸底の底部から胴部中位やや上方で強く張り出し、2本の沈線をめぐらす。その沈線上に注口部を貼り付けるが、胴部との接合にはヘラ状工具によるナデがみられる。底部外面には、荒いヘラケズリを行う。胴部最大径8.2cm、現高5.5cm。

高坏（図版10-7、図版33-6）

坏部を欠損する。脚部は細くなだらかで外反気味に開き、裾部でやや張りをみせて端部にい

たる。端部は垂直におりかえされ、かすかに外反する。脚裾部径11.6cm、現高 8.4cm。

盤（図版10-8）

体部下半を欠損する。ほぼ直線的にたちあがった体部は、口縁部で内彎気味となり、端部はにぶく外側につきだす。口縁部径27.8cm、現高 5.3cm。

(3) 各務3号窯出土遺物（図版10-9～16、図版34-1～6）

灰釉陶器壺（図版10-9～12、図版34-1～3）

（図版10-9）は、丸底の底部から体部はなだらかにたちあがり、口縁部はかすかに外反気味となり丸くおさめる。高台は貼り付けにより丸味をおびて外に開く。底部外面・体部外面下部には回転ヘラケズリを行い、底部内面には重ね焼痕が残る。灰釉は漬け掛けにより、体部上部にみられる。口縁部径12.4cm、高台部径 6.4cm、器高 5.1cm。（図版10-10、図版34-1）は、底部がやや下がり気味で、体部は直線的に開く。高台は貼り付けにより、内側が内彎気味である。底部外面および体部外面高台寄りには回転ヘラケズリを行い、底部内面には重ね焼き痕が残る。灰釉は漬け掛けによる。口縁部径14.4cm、高台部径 6.4cm、器高 5cm。（図版10-11、図版34-2）は、ほぼ平坦な底部から、体部はなだらかにたちあがり、口縁部でやや外反気味となる。高台は貼り付けにより、内側が内彎気味である。底部外面および体部外面下部には回転ヘラケズリを行い、底部内面には重ね焼痕がみられる。灰釉は漬け掛けによる。口縁部径15.4cm、高台部径 7.2cm、器高 4.9cm。（図版10-12、図版34-3）は、平坦な底部から、体部はゆるやかにたちあがり、口縁部でかすかに外反気味となる。高台は貼り付けにより、内側が内彎している。底部外面および体部外面下部には回転ヘラケズリを行う。灰釉は漬け掛けによる。口縁部径15.3cm、高台部径 8cm、器高 5.2cm。

灰釉陶器皿（図版10-13、図版34-4）

平坦な底部から、体部は低くたちあがり、口縁部はかすかに外反する。高台は小さく、貼り付けにより内彎気味である。底部外面および体部外面下部には回転ヘラケズリを行う。灰釉は漬け掛けによる。口縁部径12.2cm、高台部径 6cm、器高 2.1cm。

灰釉陶器輪花皿（図版10-14・15、図版34-5）

（図版10-14）は、底部を欠損する。体部はゆるやかにたちあがり、口縁部でかすかに外反する。口縁部には5弁の輪花がみられる。高台は貼り付けにより、ほぼ垂直であるが端部は外側が面取り状となり鋭い。体部外面下部には回転ヘラケズリを行い、底部内面には重ね焼痕が残る。灰釉は漬け掛けによる。口縁部径12.6cm、高台部径 5.8cm、器高 2.8cm。（図版10-15、図版34-5）は、やや器肉厚く、平坦な底部から体部は直線的にたちあがり口縁部にいたる。口縁部には5弁の輪花がみられる。高台は貼り付けにより、外側に開く。底部外面および体部外面高台際に回転ヘラケズリを行う。灰釉は漬け掛けによる。口縁部径12.9cm、高台部径 6.4cm、器高 3.3cm。

灰釉陶器段皿（図版10-16、図版34-6）

焼成時に融着してしまったものである。平坦な底部から、体部は外面が丸味をもってたちあ

がり、内側に段を形成したのち、やはり外面に丸味をおびて口縁部にいたる。高台は貼り付けにより、内側がやや外側に開き気味になっている。底部外面には回転ヘラケズリを行う。灰釉は自然釉との区別がつけがたく施釉方法等不明である。法量は、最下段のもので、口縁部径14.4cm、高台部径7cm、現高2.7cm。

(4) 各務4号窯出土遺物(図版10-17・18)

有台坏身(図版10-17)

底部中央を欠損する。やや下がり気味の底部から、体部は直線的に斜め上方にたちあがり、口縁部は内側がかすかに外反する。高台は貼り付けにより、小さく内側に傾斜し、端部は強く内側につきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行う。口縁部径17.8cm、高台部径13.2cm、器高4.4cm。

坏蓋(図版10-18)

天井部には張りはみられず、直線的に口縁部にいたる。口縁部は直角におりまげられるが、丸味をおびてにふいものである。つまみは扁平な擬宝珠様のものであり、整形は比較的良好である。天井部外面中位まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径16cm、器高3.6cm。

(5) 各務5号窯出土遺物(図版11-1・2)

灰釉陶器碗(図版11-1)

体部上半を欠損する。底部は平坦面をなし、高台は貼り付けにより、斜めに内彎気味に開く。底部外面には回転ヘラケズリを行い、底部内面には重ね焼痕が残る。高台部径7.8cm、現高2.5cm。

灰釉陶器皿(図版11-2)

体部を欠損する。底部はほぼ平坦であるが、内面中央部が盛りあがっている。高台は貼り付けにより、小さく断面三角形を呈する。底部外面には回転ヘラケズリを行い、底部内面に重ね焼痕が残る。高台部径5.1cm、現高1.3cm。

(6) 各務6号窯出土遺物(図版11-3~5, 図版34-7~9)

灰釉陶器碗(図版11-3・4, 図版34-7・8)

(図版11-3, 図版34-7)は、底部中央を欠損する。底部は平坦で、体部はゆるやかにたちあがり、口縁部で外反する。高台は貼り付けにより、丸味をおびて外側に開き気味である。底部外面および体部外面高台際に回転ヘラケズリを行う。底部内面には重ね焼痕が残る。灰釉は漬け掛けによる。口縁部径7.4cm、高台部径6.8cm、器高3.7cm。(図版11-4, 図版34-8)は、底部内面がやや盛りあがり気味であるが、体部は直線的に斜め上方にたちあがり口縁部にいたる。高台は貼り付けにより、やや内彎気味である。底部外面および体部外面高台際に回転ヘラケズリを行う。灰釉は漬け掛けによる。口縁部径16cm、高台部径8.4cm、器高5cm。

灰釉陶器段皿（図版11-5，図版34-9）

底部は平坦をなすと思われ、体部は内面の段を境に斜め上方にたちあがり口縁部にいたる。高台は貼り付けにより、内側は内彎しており、外側端部は強く内側に傾斜している。底部外面および体部外面高台際には回転ヘラケズリを行う。灰釉は、漬け掛けにより口縁部にみられる。口縁部径13.8cm、高台部径5cm、器高2.9cm。

(7) 各務7号窯出土遺物(図版11-6~11，図版35-1~6)

坏身（図版11-6，図版35-1）

体部は底部から直線的に斜め上方にたちあがり、受部は水平に突き出す。口縁部は低く、丸味をおびて内傾している。底部外面は、渦巻状痕を粗く回転ヘラケズリ調整している。口縁部径11cm、現高2.9cm。

坏蓋（図版11-7~9，図版35-2~4）

（図版11-7，図版35-2）は、天井部には張りがみられ、口縁部は、天井部から強く屈折したのち端部内側で厚味を減じる。口縁部径10.6cm、現高3.3cm。（図版11-8，図版35-3）は、天井部が平坦面をなし、渦巻状痕が残る。口縁部は内彎して端部にいたるが、端部はやや玉縁状を呈する。口縁部径11cm、器高3.1cm。（図版11-9，図版35-4）は、扁平な天井部には回転ヘラケズリを行い、口縁部は丸味をおびて、内面に低い返りを有する。口縁部径11.8cm、現高1.9cm。

高坏（図版11-10，図版35-5）

全体にロクロ痕が顕著である。脚部は低く、裾部にむかって強く開く。坏部と脚部との接合痕は明瞭である。裾部側面は凹面をなす。脚裾部径7.2cm、現高4cm。

甕（図版11-11，図版35-6）

口頸部は外反してたちあがり、端部側面は丸味をおびて凹面をなす。口頸部外面中位には、浅い沈線が2本みられるが、これは本来1本の沈線が施文の際に施文開始点が終了点と一致しなかったために、この部分では2本にみられるのではないかと思われる。

3. 須衛地区の出土遺物

(1) 須衛1号窯出土遺物(図版11-12~16・図版12-1・2，図版35-7~8・図版36-1~3)

山茶碗・碗（図版11-12）

底部は平坦で、体部にはやや張りがみられる。高台は貼り付けによる雑なもので、端部に榎殻痕がみられる。底部外面には回転糸切り痕が残る。高台部径6cm、現高3.1cm。

おろし碗（図版11-13，図版35-7）

底部は中央部がやや盛りあがり、体部はゆるやかにたちあがる。高台は貼り付けにより丸味をおびている。底部外面には回転糸切り痕が残り、底部内面には重ね焼痕が残る。また、体部内面下部には現在3方にヘラ状工具による荒い刻目がみられる。高台部径5.8cm、現高3.8cm。

小皿（図版11-14）

底部は平坦で、体部には張りが見られ、かすかに口縁部は外反する。底部外面には回転糸切り痕が残る。口縁部径 7.4cm、底部径 3.3cm、器高 1.8cm。

輪花小皿（図版11-15、図版35-8）

底部は平坦で、体部は張りが見られ口縁部において外反する。口縁部には 6 か所の輪花がめぐる。底部外面には糸切り痕が残る。口縁部径10.6cm、底部径 2.6cm、器高 2 cm。

盤（図版11-16、図版36-1）

平坦な底部から体部は急にたちあがり、口縁部は強く内側に折れて外反する。底部外面および体部下部には回転ヘラケズリが行われる。口縁部径36.8cm、底部径19.4cm、器高 8 cm。

片口壺（図版12-1、図版36-2）

平坦な底部から、体部はゆるやかにたちあがり、口縁部において外反する。口縁部に 1 か所指頭によって成形された注口が付く。高台は貼り付けにより、外反気味である。全体にロクロ痕が顕著であるが、体部外面下部には回転ヘラケズリが行われ、底部外面にロクロ回転を利用しないヘラケズリが見られる。また底部内面には重ね焼痕が残る。口縁部径25.2cm、高台部径10cm、器高 8.8cm。

四耳壺（図版12-2、図版36-3）

体部は肩が強く張りだし、4 か所に耳を貼り付ける。口頸部は外反して玉縁状の折り返し口縁となっている。全体にロクロ痕が顕著で、口頸部より肩部にかけて灰釉が施されている。口縁部径10cm、現高18.2cm。

(2) 須衛 2号窯出土遺物(図版12-3~14・図版13-1・2、図版36-4・5・図版37・図版38-1・2)

無台坏身（図版12-3~8、図版36-4・5・図版37-1~4）

（図版12-3、図版36-4）は、底部は平坦で、外面に渦巻状痕が残る。底部内面中央には、1本の指頭によるナデが見られる。体部にはロクロ痕が顕著にみられ、特に上部口縁部直下は強く内側にくびれるが、全体としては底部からやや開き気味にたちあがり、口縁部においてかすかに外反する。口縁部径11cm、底部径 6.3cm、器高 3.8cm。（図版12-4、図版36-5）は、やや厚味のある底部から、体部は外反気味にたちあがり、口縁部はさらに強く外反する。底部外面には渦巻状痕が残り、さらに周囲には雑な回転ヘラケズリ調整を行う。口縁部径12.3cm、底部径 6 cm、器高 4.1cm。（図版12-5、図版37-1）は、底部中央部の器肉がやや厚いが、全体になめらかなつくりで、体部は、ほぼ直線的にたちあがり、口縁部においてやや外反する。底部外面には渦巻状痕が、回転ヘラケズリ調整のためほとんど消されている。また中央部には1本の火だすき痕が見られる。口縁部径12cm、底部径 6.3cm、器高 4.1cm。（図版12-6、図版37-2）は、底部がやや丸味をおび、体部にはロクロ痕が顕著であるが、ほぼ直線的にたちあがり口縁部にいたる。底部外面には渦巻状痕をヘラ状工具によってナデ消しており、さらに中央部にはヘラ起こし痕が見られる。底部内面中央部には2本の指頭によるナデ痕が残る。口縁

部径13cm、底部径6cm、器高4.9cm。(図版12-7, 図版37-3)は、ほぼ平らな底部に、さらに二次的な底部を周囲に形成し、体部はかすかに外反気味にたちあがる。底部外面は渦巻状痕をていねいにナデ消しており、さらにへら起こし痕が中央部にみられる。口縁部径13.8cm、底部径9.2cm(中央部5.6cm)、器高3.5cm。(図版12-8, 図版37-4)は、ほぼ平らな底部から、体部は直線的にたちあがり、口縁部はかすかに外反する。底部外面は渦巻状痕をていねいにナデ消している。口縁部径15.7cm、底部径6.2cm、器高4.1cm。

有台坏身(図版12-9)

底部は中央部が高まりをみせる。高台は貼り付けにより、内側の端部が斜め上方につきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行い、底部内面中央部には「//」ヘラ記号がみられる。高台部径14cm、器高2.2cm。

坏蓋(図版12-10~12, 図版37-5・6・図版38-1)

(図版12-10, 図版37-5)は、焼成の際のひずみがみられる。天井部にはなだらかな張りがみられ、口縁部は丸味をおびて垂直におりかえされている。つまみはやや整形が悪い。天井部外面の $\frac{2}{3}$ ほどには回転ヘラケズリを行い、天井部内面中央には、かすかに「//」ヘラ記号がみられる。口縁部径16cm、器高3.6cm。(図版12-11, 図版37-6)は、焼成の際の歪みがみられる。天井部は張りを有すると思われ、口縁部は丸味をおびてあまり強くは折り返されていない。つまみは端部がやや鋭く扁平である。天井部外面の $\frac{2}{3}$ ほどに回転ヘラケズリを行う。また同外面のつまみの周囲には明瞭な段が形成されているが、これは成形の際の天井部中央にあたる粘土円板の周囲に、粘土紐を巻きつけて天井部を成形する段階で、円板部と粘土紐の接合部を十分に調整しなかったために生じたものと思われる。口縁部径15.7cm、器高4.5cm。

(図版12-12, 図版38-1)は、焼成の際のゆがみがみられるため、本来はこのように扁平な器形ではないと思われる。口縁部は強く折り返されて端部は鋭いが、他の部分では非常に丸味をおびた形のくずれた部分もみられる。つまみは扁平で、整形もやや雑である。天井部外面の $\frac{1}{2}$ ほどに回転ヘラケズリを行う。天井部内面中央部にはかすかに「一」ヘラ記号がみられる。口縁部径19.6cm、器高2.8cm。

甕(図版12-13・14・図版13-2, 図版38-2)

(図版12-13, 図版38-2)は、胴部に一對の把手を貼り付けるもので、胴部はやや急にたちあがり口頸部直下はなだらかな肩を有する。口頸部は外反してたちあがり、端部は内彎気味である。口縁部径13cm、胴部最大径13.8cm、現高8.8cm。(図版12-14)は、張りのある胴部から、口頸部は強く外反してたちあがり、端部は直立する。胴部外面には叩痕が残り、胴部内面には当具痕が残るが、当具痕はクモの巣状を呈する。(図版13-2)も、同様に内面にクモの巣状の当具痕がみられる。

平瓶(図版13-1)

口縁部はゆるやかに外反気味にたちあがり、端部を丸くおさめる。口縁部径8.4cm。

(3) 須衛3号窯出土遺物(図版13-3~10, 図版38-3~6)

有台坏身（図版13-3～5，図版38-3・4）

（図版13-3，図版38-3）は、底部中央部が下がり気味で、体部は急にたちあがり、中位で角度を変えて外反する。高台は貼り付けにより底部のやや内側にみられ、ていねいな整形で端部は内側に強くつきだす。底部外面は渦巻状痕を回転ヘラケズリによって荒く調整し、同内面中央部には、断続的な左回転のナデがみられる。口縁部径推定12cm、高台部径 8.2cm、器高 3.8cm。（図版13-4，図版38-4）は、平らな底部から体部は外反気味にたちあがり、上部で角度を変えたのちさらに外反する。高台は貼り付けにより、外側の端部が強くつきだす。底部外面は回転ヘラケズリののちナデ調整を行う。口縁部径12.2cm、高台部径 9 cm、器高 3.6cm。（図版13-5）は、底部の中央が下がり気味で、体部は外反気味にたちあがると思われる。高台は、底部のやや内側に貼り付けられ、断面は角ばっているが、端部は外側につきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行い、「一」ヘラ記号がみられる。底部内面中央部には 1本の指頭によるナデがみられる。高台部径 9.2cm、現高 3cm。

有台皿（図版13-6～8，図版38-5）

（図版13-6，図版38-5）は、底部中央部が下がり気味である。体部は、かすかに内彎気味にたちあがり、口縁端部はすどく角ばっている。高台は貼り付けにより、内側は彎曲して、外側端部は強くつきだす。底部外面は、渦巻状痕が回転ヘラケズリ調整され、底部内面中央には 1本の指頭によるナデがみられる。また体部外面高台際にも回転ヘラケズリがみられる。口縁部径14cm、高台部径 8.8cm、器高 2.5cm。（図版13-7）は、平らな底部から、体部は外反してたちあがり、口縁端部はすどく角ばっている。高台は貼り付けにより、内側は彎曲して、外側端部は強くつきだす。口縁部径13.8cm、高台部径14.2cm、器高 2.8cm。（図版13-8）は、底部中央部が丸味をおびて下がると思われ、体部は、その底部からの傾斜のまま直線的にたちあがる。口縁端部はすどく角ばっている。高台は貼り付けにより、内側は彎曲して、外側端部は強くつきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行い、中央部は大部分を欠損して全体は不明であるがヘラ記号を施す。口縁部径17cm、高台部径11cm、器高 3.8cm。

坏蓋（図版13-9・10，図版38-6）

（図版13-9，図版38-6）は、なだらかな張りのある天井部から、口縁部は強く内傾するが整形は甘い。つまみは丸味をおびたもので、比較的整形はていねいである。天井部外面の $\frac{3}{4}$ まで回転ヘラケズリを行い天井部内面中央部には、5本以上の指頭によるナデ痕がみられる。口縁部径17.2cm、器高 3.5cm。（図版13-10）は、扁平だが、やや張りのある天井部から、口縁部は折り返しをすることなく側面を面取り状に整形する。天井部外面の $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径13.2cm、現高 1.5cm。

(4) 須衛4号窯出土遺物（図版13-11～19，図版39-1・2）

坏身（図版13-11）

扁平な浅い底部から、受部は水平につきだし、口縁部は低く内傾する。口縁部径10.4cm、現高 2.5cm。

無台坏身（図版13-12、図版39-1）

平らな底部から、体部はかすかに彎曲してたちあがり、口縁部でやや外反する。底部外面は渦巻状痕を回転ヘラケズリで荒く調整している。口縁部径10.4cm、底部径6cm、器高4.3cm。

盤（図版13-13）

底部は丸底状で、高台は貼り付けにより端部が外反する。底部外面には回転ヘラケズリを行う。高台部径13.8cm、現高2cm。

坏蓋（図版13-14-16、図版39-2）

（図版13-14、図版39-2）は、天井部は扁平で、口縁部は器肉を減じ、内面の返りはかすかである。つまみは擬宝珠様を呈し、天井部外面の $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径11.4cm、器高2.5cm。（図版13-15）は、全体に器肉が厚く、天井部は張りを有し、口縁部を丸くおさめる。内面の返りにはぶく丸味をおびている。天井部外面の $\frac{1}{2}$ まで回転を利用しないヘラケズリを行う。口縁部径11cm、現高1.9cm。（図版13-16）は、やや張りを有する天井部から、口縁部は強く折り返されて端部は外につきだす。つまみは擬宝珠様のもので整形は良好である。天井部外面の $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径13.6cm、器高3.1cm。

高坏（図版13-17）

小形のつくりで、脚部は低く横に強く開くと思われる。現高3.2cm。

壺（図版13-18）

胴部下部は張りを有すると思われ、肩部はやや撫肩を呈する。口縁部は内彎気味で、端部は内側に傾斜面をもつ。口縁部径10.4cm、胴部最大径13.8cm、現高7cm。

甕（図版13-19）

肩部はほぼ直線的で、口頸部は強く外側に傾斜し、端部下部には稜を形成する。肩部外面に叩痕、同内面には当具痕が残る。

(5) 須衛5号窯出土遺物(図版13-20-24)

有台坏身（図版13-20）

底部は下がり気味で、体部にはかすかに反りがみられ、口縁端部は外反する。高台は貼り付けにより角ばっているが端部が凹面をなす。底部外面中央部に渦巻状痕が残り、周囲には回転ヘラケズリが行われる。口縁部径12.6cm、高台部径10.6cm、器高3cm。

坏蓋（図版13-21・22）

（図版13-21）は、天井部は扁平で、口縁部は丸味をもって強く折り返される。つまみは扁平な擬宝珠様のものであるが整形は良好である。天井部外面の $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径14.8cm、器高2.7cm。（図版13-22）は、焼成の際、有台坏身と重ね焼の状態に融着してしまったものである。蓋は、なだらかな張りを有して、口縁部はほぼ垂直に折り返されている。つまみは擬宝珠様を呈している。天井部外面には、ほぼ $\frac{1}{2}$ ほどの範囲に回転しながら、中央部にむかって手持ちヘラケズリを行い、その後中央部を $\frac{1}{2}$ ほどの範囲で左方向の回転ヘラケズリを行っている。口縁部径11.8cm、器高2.9cm。

盤（図版13-23・24）

（図版13-23）は、底部は中央部が下がる。高台は貼り付けにより、端部外側が強くつきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行う。高台部径11.8cm、現高2cm。（図版13-24）は、ほぼ直線的な体部から、口縁部は外反してたちあがる。高台部は欠損する。口縁部径19cm、現高1.6cm。

(6) 須衛6号窯出土遺物（図版14-1～3，図版39-3・4）

鉢（図版14-1，図版39-3）

ほぼ平坦な底部から、体部はかすかに内彎気味にたちあがり、口縁部は角度を変えて外反する。内外面とも底部より口縁部にかけて火だすき痕が残る。口縁部径33cm、底部径14.2cm、器高11.1cm。

甕（図版14-2，図版39-4）

底部はやや上げ底気味で、胴下部は直線的にたちあがる。底部径12.8cm、現高12.1cm。

皿（図版14-3）

体部はわずかに彎曲し、口縁部は外反する。口縁部径8cm、現高1.6cm。

(7) 須衛7号窯出土遺物（図版14-4～12・図版15-1，図版39-5～8・図版40-1）

有台坏身（図版14-4・5）

（図版14-4）は、器肉の厚い底部から、体部は彎曲気味にたちあがり、口縁部はかすかに外反する。高台は貼り付けにより、角ばって端部は外につきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行う。口縁部径12.6cm、高台部径9.8cm、器高3.1cm。（図版14-5）は、底部は中央部にむかって下がり気味で、体部は斜め上方にたちあがる。高台は貼り付けにより、角ばって外側端部が強くつきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行う。口縁部径22.4cm、高台部径18cm、器高3.9cm。

环蓋（図版14-6・7・10，図版39-5・6）

（図版14-6，図版39-5）は、天井部はやや張りを有し、口縁部は垂直に折り返され、端部でかすかに外反する。つまみは扁平であるが整形は良好である。天井部外面には $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径16.9cm、器高3cm。（図版14-7，図版39-6）は、天井部はゆるやかに張りを有して、口縁部は垂直に折り返される。つまみは扁平で、整形はやや悪い。天井部外面には $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリが行われるが、それ以前に、中央部から周辺にむかって左方向に回転しながらの手持ちヘラケズリが行われる。口縁部径17cm、器高3.4cm。（図版14-10）は、環状つまみを有する蓋である。

盤（図版14-8・9，図版39-7）

（図版14-8）は、ほぼ平らな底部から、序々に体部へと移行し、口縁部は垂直にたちあがったのち外反する。高台は貼り付けにより、端部は外側に強くつきだす。体部外面は、高台際に回転ヘラケズリを行う。口縁部径18.4cm、高台部径11.8cm、器高4.2cm。（図版14-9，図

版39-7)は、下がり気味の底部から、序々に体部へと移行し、口縁部はやや斜めにたちあがったのちかすかに外反する。高台は貼り付けにより、角ばって端部は外につきだす。底部外面は回転ヘラケズリを行う。口縁部径21.8cm、高台部径15.2cm、器高 3.3cm。

壺 (図版14-11・12)

(図版14-11)は、明瞭な肩を有し、口縁部は内彎してたちあがる。肩に把手の痕が残る。口縁部径 8.2cm、胴部最大径17cm、現高 4.1cm。(図版14-12)は、平らな底部から胴部は直線的にたちあがり、明瞭な肩を形成する。胴部外面下部には、回転ヘラケズリを行う。底部径 15.4cm、胴部最大径22.2cm、現高 6.1cm。

甕 (図版14-13, 図版39-8)

胴部は彎曲してたちあがり、口頸部直下で最大に張りだす。口頸部は外傾してたちあがり、口縁部は内側に折り返しを行う。口縁部径21cm、胴部最大径20.8cm、現高 8.3cm。

円面碗 (図版15-1, 図版40-1)

陸部を欠損する。海部の外縁は、断面台形を呈して強く外側に張りだし、台脚部との境には段を有する。台脚部は直線的に開き、裾部は横につきだす。台脚部側面にはヘラ描による沈線を多数配する。外縁部径20.8cm、台脚部径25.5cm、器高 6.6cm。

(8) 須衛 8号窯出土遺物(図版15-2, 図版40-2)

壺 (図版15-2, 図版40-2)

全体に器肉が厚く、平坦な底部から体部はゆるやかにたちあがると思われる。高台は貼り付けにより低い三角形を呈する。底部外面には回転糸切り痕が残る、底部内面には重ね焼痕が残る。高台部径 6 cm、現高 2.7cm。

(9) 須衛 9号窯出土遺物(図版15-3~14, 図版40-3~5)

無台坏身 (図版15-3・4, 図版40-3)

(図版15-3, 図版40-3)は、やや丸味をおびた底部から、体部は直線的にたちあがる。底部外面には渦巻状痕をヘラケズリ調整しており、底部内面中央部には1本の指頭によるナデがみられる。口縁部径11cm、底部径 6 cm、器高 3.7cm。(図版15-4)は、底部と体部との境が明瞭で、体部は直線的にたちあがる。口縁部径12cm、現高 4.4cm。本資料は一応無台坏身としてとりあつかったが、有台坏身の可能性もある。

有台坏身 (図版15-5~8, 図版40-4)

(図版15-5, 図版40-4)は、底部の器肉が厚く、体部は丸味をもってたちあがり口縁部にいたる。高台は貼り付けにより丸味をおびており、端部外側がややつきだす。口縁部径10cm、高台部径7.6cm、器高3.3cm。(図版15-6)は、底部は平らをなすと思われ、体部はゆるやかにたちあがり、口縁部は外反気味となる。高台は貼り付けにより、丸味を有して外に開くものである。口縁部径19.4cm、高台部径14cm、器高4.5cm。(図版15-7)は、(図版15-6)とはほぼ同じであるが、高台の規模が器形全体とくらべてやや小形である。底部外面には回転ヘラケズリを

行う。口縁部径19.4cm、高台部径12.6cm、器高4.6cm。(図版15-8)は、底部付近のみであるが、やはり、(図版15-6)・(図版15-7)と同様で、高台の形態がやや角ばって、端部が内側につきだすものである。底部外面には回転ヘラケズリを行う。高台部径14cm、現高2.7cm。

坏蓋(図版15-9・10)

(図版15-9)は、天井部がなだらかな張りを有し、口縁部は丸味のある断面三角形を呈する。つまみは扁平なものである。天井部外面には $\frac{1}{2}$ ほどに回転ヘラケズリを行う。口縁部径19.4cm、器高4cm。(図版15-10)は、天井部がやや張りを有し、口縁部は垂直に折り返されている。つまみは扁平であるが比較的整ったものである。天井部外面の $\frac{1}{2}$ ほどに回転ヘラケズリを行う。口縁部径16cm、器高3.3cm。

盤(図版15-11, 図版40-5)

ほぼ平坦な底部から、体部は序々にたちあがり、口縁部は端部内側が斜め下方につきだす。口縁部径22.8cm、現高3.4cm。

壺(図版15-12)

胴部下半は丸味をおびてたちあがり、肩部にはやや張りがみられる。口頸部は外反して口縁部で直立すると思われる。胴部最大径14.8cm、現高8.2cm。

甗(図版15-13・14)

(図版15-13)は、よく張った胴部から、口頸部は外反してたちあがり、口縁部で内傾する。胴部外面に叩痕、胴部内面には当具痕が残る。口縁部径15.2cm、現高3.9cm。(図版15-14)は、底部はほぼ平坦で、胴部は口頸部直下でゆるく張りをみせる。口頸部は強く外反すると思われる。胴部最大径17.4cm、底部径10.2cm、現高8.7cm。

※須衛9号窯は昭和47年に地獄洞古窯跡として発掘調査が行われている。詳細については、『各務原市史』(考古・民俗編 考古)を参照されたい。

(10) 須衛10号窯出土遺物 (図版15-15~17・図版16・17, 図版41)

無台坏身(図版15-15)

底部は丸味を有すると思われる。体部は直線的にたちあがり、口縁部で外反気味となる。底部外面にはヘラナデ調整を行う。口縁部径12.8cm、底部径7cm、現高4.1cm。

有台坏身(図版15-16, 図版41-1)

底部は中央部の器肉が厚く、また高台よりも低く下がっている。体部はほぼ直線的にたちあがる。高台は貼り付けにより、やや角ばっているが内側端部はすどい。底部外面には回転ヘラケズリを行う。口縁部径20cm、高台部径15.2cm、現高5.8cm。

蓋(図版15-17)

つまみは扁平で、整形もやや雑である。

鉢(図版16-1・2, 図版41-2)

底部はやや丸味を有すると思われる。体部は直線的にたちあがり口縁部で内彎する。体部下には回転ヘラケズリを行う。(図版16-1, 図版41-2)は、口縁部径13.6cm、底部径8cm、

現高 7.6cm。(図版16-2)は、口縁部径13.6cm、底部径 8.4cm、現高 7.6cm。

長頸瓶(図版16-3~5)

(図版16-3)は、頸部は3段接合による。口頸部は外反しながらちあがる。現高 8.9cm。

(図版16-4)は、体部下部にはゆるやかな張りがみられ、肩は稜をなす。体部最大径17.8cm、現高 8.7cm。(図版16-5)は、底部はほぼ平担をなし、体部は丸味をおびてちあがる。高台は貼り付けにより、端部は内側に面取り状をなす。高台部径11.4cm、現高 8.3cm。

甕(図版16-6~8・図版17, 図版41-3~5)

(図版16-6, 図版41-3)は、強く張りのある胴部から、口頸部は、外反気味にちあがり、口縁端部を上方につまみあげる。胴部外面には叩痕、内面には当具痕が残る。口縁部径 16.7cm、現高 6.1cm。(図版16-7・8)は、それぞれ甕胴部の破片である。(図版16-8)の内面には、当具の条間に原体の木目が浮き出ている。(図版17-1, 図版41-4)は、口頸部は外反してちあがり、口縁端部は丸味をおびているが斜め上方につきだす。口縁部径44cm、現高15.3cm。(図版17-2, 図版41-5)は、卵形の底部をなす。体部外面には、叩痕が残る。叩具の原体は、木目に対して斜位の条線を刻む。体部内面には二種類の当具痕が残る。最初に同心円の当具を用い、次に平行条線の当具を用いている。特に平行条線の当具痕には、原体に用いられた木口の年輪の圧痕が明瞭で、それによれば、径3cm×4cmほどの楕円形を呈する樹木を年輪に対して直角に截断し、その截断面に6本の条線を刻んで当具としている。現高22.5cm。

(1) 須衛11号窯出土遺物(図版18-1~6, 図版42)

無台坏身(図版18-1・2, 図版42-1・2)

(図版18-1・図版42-1)は、ほぼ平らな底部から、体部は直線的にちあがり、口縁部は内側がやや厚みを減じる。底部外面には渦巻状痕をナデ調整している。口縁部径12.4cm、底部径 7cm、器高 4.2cm。(図版18-2, 図版42-2)は、丸味のある底部から、体部は内彎気味にちあがり口縁部にいたる。底部外面には渦巻状痕をナデ調整している。口縁部径13.6cm、底部径 9cm、器高 4.5cm。

坏蓋(図版18-3~6, 図版42-3~6)

(図版18-3, 図版42-3)は、天井部は張りを有し、口縁部は弱く折り返している。つまみは貼り付けにより扁平で、頂部が丸味をもつ。天井部外面には $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径13.4cm、器高 3.1cm。(図版18-4, 図版42-4)は、天井部はロクロ痕が目立ち、ややつぶれ気味である。口縁部は垂直に折り返されて端部で外反する。つまみは扁平で丸味をおびたものである。天井部外面 $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径14.7cm、器高 3.4cm。(図版18-5, 図版42-5)は、天井部は低く、口縁部は垂直に折り返され、端部はやや外反して丸くおさめる。つまみは扁平でつぶれたものである。天井部内面中央に1本の指頭によるナデが残る。外面は降灰のため不明。口縁部径15.4cm、器高 2.5cm。(図版18-6, 図版42-6)は、天井部は器肉が厚く張りを有するが、焼成の際の歪みかもしれない。つまみは扁

平で整形は悪い。天井部外面には、回転ヘラケズリを行う。器高 4.2cm。

(12) 須衛12号窯出土遺物(図版18-7~10, 図版43-1・2)

有台坏身(図版18-7)

底部は中央部が下がり、中央部は高台より下にある。体部は直線的であるが、端部は丸味をもって外反する。高台は貼り付けにより、端部内側に面取り状をなす。底部外面には回転ヘラケズリを行う。口縁部径23cm、高台部径19cm、現高 4.3cm。

坏蓋(図版18-8)

天井部は扁平で、口縁部は丸味をおびて垂直に折り返す。つまみは整形の良好な、やや扁平な擬宝珠様を呈する。天井部外面の $\frac{1}{2}$ に回転ヘラケズリを行う。天井部内面中央部には指頭によるナデが残る。口縁部径12cm、器高 2.4cm。

盤(図版18-9・10, 図版43-1・2)

(図版18-9, 図版43-1)は、底部中央が上がり気味で、口縁部は外反して端部を丸くおさめる。高台は貼り付けにより端部が外につきだす。底部外面には渦巻状痕がヘラケズリ調整され、底部内面中央には指頭によるナデが残る。口縁部径15.6cm、高台部径 9.8cm、器高 2.5cm。(図版18-10, 図版43-2)は、底部はほぼ平らで、体部は序々にたちあがって口縁部で外反する。高台は貼り付けにより外に開き、端部外面はつきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行い、底部内面中央部には不整な指頭によるナデがみられる。また、底部内外面には「×」ヘラ記号がみられる。口縁部径20cm、高台部径11.7cm、器高 3.4cm。

(13) 須衛18号窯出土遺物(図版18-11~17・図版19-1・2, 図版43-3・4・図版44-1~3)

無台坏身(図版18-11~13, 図版43-3・4・図版44-1)

(図版18-11, 図版43-3)は、平らな底部から、体部は外面に丸味を有して口縁部でかすかに外反する。底部外面は渦巻状痕をヘラケズリ調整し、中央部には「一」ヘラ記号がみられる。底部内面中央部には指頭によるナデが残る。口縁部径12.2cm、底部径 6.4cm、器高 4cm。

(図版18-12・13, 図版43-4・図版44-1)は、平らな底部から体部は直線的にたちあがる。底部外面には渦巻状痕が残る。(図版18-12, 図版43-4)は、口縁部径12.2cm、底部径 6cm、器高 4.1cm。(図版18-13, 図版44-1)は、口縁部径12.6cm、底部径 6cm、器高 4cm。

有台坏身(図版18-14・15, 図版44-2・3)

底部は著しく肥大し、体部はほぼ直線的にたちあがって口縁部で厚味を減じる。高台は貼り付けにより、(図版18-14, 図版44-2)は端部が内外に張り出し、(図版18-15, 図版44-3)は端部が外側につきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行う。(図版18-14, 図版44-2)は口縁部径13.6cm、高台部径 9cm、器高 4.8cm。(図版18-15, 図版44-3)は口縁部径13.6cm、高台部径 9cm、器高 4.8cm。

坏蓋(図版18-16)

天井部は張りを有し、口縁部は丸味をおびて整形はあまりよくない。つまみは扁平であるが整形は良好である。天井部外面には口縁部際まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径19cm、器高 4.5cm。

甕（図版18-17・図版19-1）

（図版18-17）は、口頸部は外反してたちあがり、口縁端部はにぶく直立する。胴部外面に叩痕、体部内面に渦巻状当具痕が残る。口縁部径18.4cm、現高 4.7cm。（図版19-1）は、口頸部は外反してたちあがり、口縁端部は外側に面をつくりだし内傾する。胴部外面には叩痕、胴部内面には当具痕が残る。口縁部径22cm、現高 6.2cm。

播鉢（図版19-2）

底部外面は張りを有し、竹管状工具による刺突痕がみられる。底部径11cm、現高 2.4cm。

(14) 須衛19号窯出土遺物(図版19-3～7)

有台坏身（図版19-3）

底部は、内面中央周囲が肉厚となり、体部は丸味をおびてたちあがる。口縁端部はやや外側に反り気味となる。高台は貼り付けにより、丸味をおびてかすかに内傾する。底部外面には不整なヘラケズリを行い、底部内面中央部には不整なナデを行う。口縁部径14cm、高台部径 9.4cm、器高 4.3cm。

皿（図版19-4）

底部はかすかに張りを有し、口縁部は端部で強く外反する。底部外面には回転ヘラケズリを行い、底部内面中央部には不整なナデを行う。口縁部径15.2cm、現高 2cm。

坏蓋（図版19-5）

天井部は張りを有し、口縁部は小さく折り返されている。つまみは扁平で、整形はやや悪い。天井部外面の $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行い、天井部内面中央部には1本の指頭によるナデ痕がみられる。口縁部径15.4cm、器高 3.8cm。

瓶（図版19-6）

胴部は、ほぼ直線的にたちあがり、強く肩がつきだす。肩稜部には1本の沈線がめぐる。口頸部は2段接合により、胴部に比較してやや太めである。胴部外面には回転ヘラケズリを行う。胴部最大径17.2cm、現高 7.1cm。

壺（図版19-7）

胴部は算盤玉状を呈し、口頸部は強く外反すると思われる。胴部最大径16.4cm、現高 7.3cm。

(15) 須衛20号窯出土遺物(図版19-8～12, 図版44-4・5)

無台坏身（図版19-8, 図版44-4）

底部は平坦で、体部は丸味をもってたちあがる。底部外面は渦巻状痕にヘラケズリ調整がみられる。底部径 4.8cm。

坏蓋（図版19-9・10, 図版44-5）

(図版19-9、図版44-5)は、天井部は低く扁平であるが焼成の際の歪みによるためかも知れない。口縁部は垂直に折り返されているが、丸味のあるややにぶいものである。つまみは扁平であるが整形は良好である。天井部外面には口縁部際まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径18.8cm、現高 3.7cm。(図版19-10)は、天井部はなだらかに反り気味で、つまみは擬宝珠様のもので整形は良好である。天井部外面には現存部の $\frac{3}{4}$ に回転ヘラケズリを行い、天井部内面中央には、多数の一定方向の指頭によるナデがみられる。現存天井部径24cm、現高 3.7cm。

盤(図版19-11)

底部は、中央部にむかってやや上げ底気味となり、口縁部は直線的にたちあがる。底部外面には回転ヘラケズリを行う。口縁部径19cm、現高 3.2cm。

甕(図版19-12)

口縁部は外反してたちあがり、口縁端部は外面に凹面を形成して丸くおさめる。胴部外面には叩痕、胴部内面には当具痕が残る

(16) 須衛21号窯出土遺物(図版20)

無台坏身(図版20-1~3)

(図版20-1)は、底部は丸味をおびて、体部は直線的に斜めにたちあがる。底部外面にはナデ調整を行う。口縁部径13.2cm、底部径7.6cm、現高 3.6cm。(図版20-2)は、底部が上げ底状を呈し、体部は直線的に斜めにたちあがり、口縁部でかすかに外反する。底部外面には渦巻状痕が残る。口縁部径13cm、底部径 7 cm、器高 2.7cm。(図版20-3)は、底部が上げ底状を呈し、体部はやや彎曲してたちあがり、口縁部は強く外反する。底部外面には渦巻状痕が残る。口縁部径13.6cm、底部径 6.4cm、器高 2.8cm。

有台坏身(図版20-4~8)

(図版20-4)は、底部中央が下がり、体部はかすかに彎曲してたちあがり口縁部で丸くおさめる。高台は貼り付けにより強く外側に開き、端部は丸味をもつ。底部外面には回転ヘラケズリを行う、中央部には欠損しているが「一」ヘラ記号がみられる。口縁部径13.4cm、高台部径10cm、器高 3.7cm。(図版20-5)は、底部中央が下がり、高台は貼り付けにより角ばったものであるが、全体に外反気味をなして端部は凹面を形成する。底部外面には回転ヘラケズリを行い、中央部に「く」ヘラ記号がみられる。高台部径11cm、現高 2 cm。(図版20-6)は、底部はほぼ平らで、外面の体部との境は鋭い角をなす。高台は貼り付けにより端部外側が強くつきだし、端部は凹面を形成する。底部外面には回転ヘラケズリを行う。高台部径11cm、現高 1.9cm。(図版20-7)は、底部は平らで外面の体部との境は鋭い角をなす。高台は貼り付けにより、端部外側が面取り状をなす。底部外面には回転ヘラケズリを行う。高台部径 7.8cm、現高 1.9cm。(図版20-8)は、体部は直線的に斜めにたちあがり、口縁端部は外側で面取り状をなして内側につきだす。高台は貼り付けにより角ばったもので、端部は凹面をなす。口縁部径13.8cm、高台部径 7 cm、器高 3.7cm。

坏蓋(図版20-9)

焼成の際の歪みがみられるが、天井部は強く張りを有し、口縁部は内側に小さく折り返される。つまみは丸味をおびたていねいなつくりである。天井部外面には $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行い、天井部内面中央には一定方向の指頭によるナデが残る。口縁部径17.8cm、器高 5.2cm。

盤（図版20-10-12）

（図版20-10）は、底部はやや丸味をおびて、口縁部は外反気味にたちあがる。端部は内・外側につきだす。高台は貼り付けにより外開きで、端部外側は強くつきだして凹面をなす。底部外面には不整なヘラケズリを行い、中央部には欠損しているが「一」ヘラ記号がみられる。口縁部径14.3cm、高台部径 9.8cm、器高 3.1cm。（図版20-11）は、底部は平らで、高台は貼り付けにより外に開き、端部は凹面をなす。高台部径14.2cm、現高 2.4cm。（図版20-12）は、底部はほぼ平らで、高台は貼り付けにより内彎気味となり、端部は凹面をなす。高台側面には台形の透孔、およびヘラ描平行沈線が配されている。高台部径14.4cm、現高4.3cm。

瓶（図版20-13）

底部は平らで、胴部はゆるやかな張りをみせてたちあがる。高台は貼り付けによる角ばったもので、全体に外反気味を呈し、端部は凹面をなす。胴部外面には回転ヘラケズリを行う。高台部径11cm、現高 9.3cm。

甕（図版20-14）

口頸部は強く外反し、口縁端部は内外面がくびれ部をなしたのち外側に強くつきだす。

※須衛21号窯～25号窯は昭和49年に稲田山古窯跡群として発掘調査が行われている。詳細については『稲田山古窯跡群発掘調査報告書』・『各務原市史』（考古・民俗編 考古）を参照されたい。

(17) 須衛22号窯出土遺物（図版21、図版45・図版46-1-3）

無台坏身（図版21-1）

底部はかすかに張りを有し、体部は彎曲気味にたちあがる。口縁部はやや肉厚である。底部外面にはヘラナデを行う。口縁部径12cm、底部径 6.6cm、器高 3.6cm。

有台坏身（図版21-2-5、図版45）

（図版21-2、図版45-1）は、底部は張りを有し、体部は底部から連続してたちあがる。口縁部はかすかに外反する。高台は貼り付けにより、端部外側が面取り状をなして全体にシャープなつくりである。底部外面は渦巻状痕を回転ヘラケズリ調整している。底部内面には一定方向の指頭によるナデを行い、重ね焼痕がみられる。口縁部径13.4cm、高台部径 6.2cm、器高 4cm。（図版21-3、図版45-2）は、ほぼ平らな底部から、体部はゆるやかにたちあがる。高台は貼り付けにより、端部外側が面取り状の凹面をなして全体にシャープなつくりである。底部外面には回転ヘラケズリがみられ、中央部には浅い「？」ヘラ記号がみられる。底部内面には中央部に1本の指頭によるナデが残る。高台部径 7.4cm、現高 2.6cm。（図版21-4・5、図版45-3・4）は、それぞれ有台坏身の重ね焼の状態である。特に（図版21-5、図版45-4）の底部外面には浅い「×」ヘラ記号がみられ、底部内面には十字状の火だすき痕が残る。

壺（図版21-6、図版46-1）

肉厚の底部に、断面三角形を呈する低い高台を貼り付ける。底部外面には糸切り痕が残る。
高台部径 7.4cm、現高 2.3cm。

太頸瓶（図版21-7・8、図版46-2・3）

いずれも口頸部は2段接合により外反してたちあがる。口縁部は直下になぶい稜をめぐらし、上面には丸味のある断面三角形の稜をつくり出す。（図版21-7、図版46-2）は、口縁部径15.4cm、現高8cm。（図版21-8、図版46-3）は、口縁部径12.6cm、現高7.8cm。

甕（図版21-9）

口頸部は外反してたちあがり、口縁部は直下に低いかすかな稜をめぐらして、上面には端部を折り返したような丸味のある稜をつくり出す。胴部外面には叩痕、胴部内面には当具痕が残る。口縁部径38.8cm、現高14.9cm。

(18) 須衛23号窯出土遺物（図版22-1・2、図版46-4）

灰釉陶器碗（図版22-1、図版46-4）

やや張りを有する底部から、体部はゆるやかにたちあがって口縁部で外反する。高台は貼り付けにより、細く角ばってかすかに彎曲気味に開く。底部外面にはナデ調整がみられる。体部内外面上部に漬け掛けによる灰釉がみられる。口縁部径16.3cm、高台部径7.8cm、器高4.9cm。

灰釉陶器輪花碗（図版22-2）

体部は張りを有して、口縁部は外反する。口縁部には輪花がみられる。体部内外面上部に漬け掛けによる灰釉がみられる。口縁部径17.5cm、現高3.7cm

(19) 須衛25号窯出土遺物（図版22-3～9）

無台坏身（図版22-3）

底部はかすかに張りを有し、体部はゆるやかにたちあがると思われる。底部外面には、渦巻状痕をナデ調整し、中央部には「一」ヘラ記号がみられる。底部内面中央には指頭によるナデ痕が残る。底部径7.4cm、現高2.2cm。

有台坏身（図版22-4～6）

（図版22-4）は、底部中央がわずかに高まり、高台は貼り付けにより、角ばって内側に面取り状の傾斜をみせる。底部外面には回転ヘラケズリを行い、中央部には「一」ヘラ記号がみられる。底部内面中央部には指頭による1本のナデ痕がみられる。高台部径9cm、現高1.6cm。

（図版22-5）は、底部は中央部で厚みを減じる。高台は貼り付けにより端部は外側につきだし、内側にむかって面取り状の傾斜をみせる。底部外面には不整なヘラケズリを行い、底部内面中央部には指頭による1本のナデ痕がみられる。高台部径11cm、現高2cm。（図版22-6）

は、底部は平坦で、体部は底部から強く折れてたちあがる。高台は貼り付けにより、底部外縁からかなり中央寄りに付けられており、高台端部は強く外につきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行う。高台部径8cm、底部径10.8cm、現高2.4cm。

蓋（図版22-7～9）

(図版22-7)は、焼成の際の歪みがみられる。天井部は現状ほどではないにしても張りを有すると思われ、口縁部は垂直に折り返される。つまみはやや扁平であるが比較的整った整形である。天井部外面の%には回転ヘラケズリを行う。天井部内面中央部には指頭によるナデ痕がみられる。口縁部径14.8cm、器高 3.1cm。(図版22-8)は、やや扁平な天井部から口縁部は強く折れるが、端部は外に開く。天井部外面には、全面回転ヘラケズリを行う。口縁部径12.6cm、現高 1.8cm。(図版22-9)は、天井部が途中で強く屈折して口縁部に至るが、焼成の際の歪みとも考えられる。口縁部は丸味をおびて垂直に折り返す。天井部外面の%に回転ヘラケズリを行う。口縁部径21cm、現高 2.8cm。

(20) 須衛26号窯出土遺物(図版22-10)

灰釉陶器碗(図版22-10)

体部はほぼ直線的にたちあがり、口縁部はゆるく外反する。高台は貼り付けにより、細身でやや角ばっている。体部内外面上部には、漬け掛けによる灰釉がみられる。口縁部径14.2cm、高台部径 6.6cm、器高 4.3cm。

(21) 須衛27号窯出土遺物(図版22-11, 図版46-5)

灰釉陶器碗(図版22-11, 図版46-5)

底部はほぼ平坦で、体部は直線的にたちあがり、口縁部で外反する。高台は貼り付けにより、端部外側を面取り状に調整する。底部外面には回転ヘラケズリを行う。体部内外面には漬け掛けによる灰釉がみられる。口縁部径14.4cm、高台部径 7.2cm、器高 5cm。

(22) 須衛29~32号窯出土遺物(図版22-12~17)

有台坏身(図版22-12)

底部は平坦で、体部はゆるやかにたちあがる。高台は貼り付けにより小形で丸味をもつが、端部外面は凹面をなす。底部外面は渦巻状痕をナデ調整している。高台部径 7.4cm、現高 2.4cm。

灰釉陶器碗(図版22-13・14)

(図版22-13)は、底部は平らで、高台は貼り付けにより小形で角ばっている。底部外面には回転ヘラケズリを行う。高台部径 6.6cm、現高 1.4cm。(図版22-14)は、底部は平坦で、体部はゆるやかにたちあがると思われる。高台は貼り付けによるが剥離している。底部外面には回転糸切り痕が残る。底部径 5.6cm、現高 2.2cm。

碗(図版22-15)

底部は平坦で、高台は貼り付けにより丸味をおびた断面三角形を呈する。底部外面には回転糸切り痕が残る。高台部径 7.8cm、現高 1.8cm。

蓋(図版22-16)

天井部は扁平で、つまみは整った擬宝珠様の形態を呈する。天井部外面には回転ヘラケズリを行い、天井部内面中央部には不整なナデ痕が残る。現高 2.2cm。

甕 (図版22-17)

内面の当具痕には圏線と平行線の2種類がみられる。

(23) 須衛33号窯出土遺物 (図版23-1~10)

坏身 (図版23-1・2)

(図版23-1)は、底部は浅く丸味をおびる。受部は小さくつきだし、口縁部は低く内傾する。底部外面下部に回転ヘラケズリを行う。口縁部径11cm、現高 3.4cm。(図版23-2)は、底部は扁平で、受部は斜め上方につきだす。口縁部は低く内傾して端部は直立気味となる。底部外面は渦巻状痕をナデ調整し、その周囲には回転ヘラケズリがみられる。口縁部径11cm、器高 3.7cm。

蓋 (図版23-3・4)

(図版23-3)は、天井部頂部が平坦面をなし、口縁部にむかってなだらかな張りを有する。口縁端部はかすかに外反する。口縁部径11.8cm、器高 4.3cm。(図版23-4)は、天井部には回転ヘラケズリを行い、つまみは扁平でやや整形が悪い。

高坏 (図版23-5)

脚部は序々に広がり、裾端部は外に開く。脚部中央部に1本の沈線がめぐり、その上・下部に2段2方向の透孔を有する。脚裾部径10.6cm、現高 6.5cm。

鉢 (図版23-6)

体部はやや彎曲気味を呈し、口縁部は内彎して内側に平坦面を形成する。体部外面には口縁部間際までカキ目調整を行い1本の沈線をめぐらす。その沈線の上に把手を貼り付ける。

甕 (図版23-7~10)

(図版23-7)は、口縁部は外反してたちあがり、端部で外面に1本の沈線をめぐらし直立気味となる。(図版23-8)は、口縁部は外反してたちあがり、端部外面に1本の沈線をめぐらし、内面は面取り状を呈する。(図版23-9)は、口頸部が外反してたちあがり、端部は外面で下方につきだし、上方は内彎する。口頸部外面には、上部から4本・2本・3本の沈線を3段にめぐらす。(図版23-10)は、口頸部は外反し、外面には5本一組の櫛歯文を縦位に施し、その後には2本一組の沈線を横位にめぐらす。

(24) 須衛34号窯出土遺物 (図版23-11)

山茶碗・碗 (図版23-11)

底部は平坦で、体部はかすかに丸味をもってたちあがる。高台は貼り付けにより、小さくつぶれたもので、榎殻痕が付着する。底部外面には回転糸切り痕が中央部で上下に段状となっている。底部内面中央部には指頭によるナデ痕がみられる。高台部径5cm、現高 3.6cm。

②5 須衛35号窯出土遺物（図版23-12~15）

灰釉陶器碗（図版23-12・13）

（図版23-12）は、体部に強い張りがみられ、口縁部は外反する。体部内外面には漬け掛けによる灰釉が施される。口縁部径13.2cm、現高4cm。（図版23-13）は、底部は平坦で、体部は中位で屈折したのち口縁部で外反する。高台は貼り付けにより底部の側面にみられ、丸味をおびている。底部外面には回転糸切り痕が残る。体部内外面には漬け掛けにより灰釉が施される。口縁部径11cm、高台部径6cm、器高3.5cm。

山茶碗・碗（図版23-14）

底部は平らで、高台は貼り付けにより、つぶれた断面三角形を呈する。高台端部には榎殻痕が付着し、底部外面には糸切り痕が残る。高台部径4.4cm、現高1.3cm。

甕（図版23-15）

口縁端部は、上方に突起状につきだす。灰釉陶器と思われる。

②6 須衛36号窯出土遺物（図版24-1~5、図版46-6）

有台坏身（図版24-1、図版46-6）

底部は張りを有し、体部は内彎してたちあがる。高台は貼り付けにより、端部外側が強くなりつきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行う。口縁部径11.2cm、高台部径9.6cm、器高3.3cm。

坏蓋（図版24-2）

天井部にはなだらかな張りがみられ、口縁部は強く折り返されて端部がかすかに外反する。天井部外面には%まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径19.4cm、現高2.9cm。

盤（図版24-3）

底部は平らをなすと思われ、口縁部は斜めにたちあがる。口縁端部内側は面取り状を呈する。高台は貼り付けにより、細身で端部外側がややつきだす。底部外面は回転ヘラケズリののちナデ調整を行い、底部内面中央部には不定方向のナデがみられる。口縁部径20cm、高台部径13cm、器高2.2cm。

太頭瓶（図版24-4）

口頸部にはかすかに張りがみられ、上部で外反する。口縁端部は強く内側に折り返される。口縁部径14cm、現高6.2cm。

瓶類（図版24-5）

底部は中央部に焼成の際の歪みがみられる。胴部は強く横に張り出し、肩を形成する。肩より下部の外面には、回転ヘラケズリを行う。高台は貼り付けにより、角ばって端部外側がつきだす。胴部最大径17.8cm、高台部径11.6cm、現高10.4cm。

②7 須衛37号窯出土遺物（図版24-6~13、図版47-1~4）

無台坏身（図版24-6）

底部はほぼ平らで、体部は張りを有してたちあがり、口縁部で外反する。底部外面には渦巻

状痕が残る。口縁部径11.8cm、底部径6cm、器高3.2cm。

有台坏身（図版24-7・8，図版47-1・2）

（図版24-7，図版47-1）は、底部が張りを有し、体部は直線的にたちあがり口縁部に至る。高台は底部のやや中央寄りに貼り付けられ、端部外側が強つきだす。底部外面には不定方向のヘラケズリを行う。口縁部径13.2cm、高台部径9cm、器高3.9cm。（図版24-8，図版47-2）は、底部はかすかに張りを有する。体部は直線的にたちあがり、口縁付近で角度を変えてかすかに外反する。高台は底部のやや中央寄りに貼り付けられ、端部外側が強つきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行い、底部内面中央部には不定方向のナデを行う。口縁部径22.2cm、高台部径18cm、器高4.5cm。

坏蓋（図版24-9）

焼成の際の歪みがみられるが、天井部は張りを有すると思われる。口縁部は強く垂直に折り返されている。つまみは擬宝珠様のととのったつくりである。天井部外面の $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行う。天井部内面中央部には、2本の指頭による一定方向のナデ痕が残る。口縁部径12.8cm、器高2.4cm。

盤（図版24-10~12，図版47-3・4）

（図版24-10）は、底部は張りを有し、口縁部は丸味をおびてかすかに外反する。高台は貼り付けにより、角ばって端部内側がつきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行う。口縁部径19cm、高台部径12.8cm、器高2.9cm。（図版24-11，図版47-3）は、底部が高台端部付近まで下がり、口縁部は丸味をおびて端部がやや外反する。高台は貼り付けにより端部外側がややつきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行う。口縁部径18cm、高台部径13cm、器高3.2cm。（図版24-12，図版47-4）は、底部は中央部で盛り上がりと思われ、口縁部は外反してたちあがる。高台は貼り付けにより、細身で端部外側でかすかに外反する。底部外面には回転ヘラケズリを行う。口縁部径20.4cm、高台部径13.8cm、器高3cm。

短頸壺（図版24-13）

胴部は肩が丸味をもって張り出し、口縁部は直立する。口縁部径7.8cm、胴部最大径10cm、現高4.1cm。

(28) 須衛38号窯出土遺物（図版24-14，図版47-5）

坏蓋（図版24-14，図版47-5）

焼成の際の歪みがみられるが、天井部は張りを有すると思われ、口縁部は内側に折り返される。天井部外面には $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行い、天井部内面中央部には1本の指頭によるナデ痕がみられる。口縁部径推定12.8cm、器高2.9cm。

(29) 須衛40号窯出土遺物（図版24-15）

甕（図版24-15）

口頸部は外反してたちあがり、端部上面は突起状につきだす。

③① 須衛41号窯出土遺物（図版24-16、図版47-6）

坏蓋（図版24-16、図版47-6）

全体に肉厚で、天井部にはやや歪みがみられるが張りを有して口縁部は丸くおさめる。かえりは低くにぶいものである。つまみは擬宝珠様を呈する。天井部外面頂部には回転ヘラケズリを行う。口縁部径15cm、器高 4.1cm。

③② 須衛42号窯出土遺物（図版25-1～3、図版48-1・2）

坏蓋（図版25-1・2、図版48-1）

（図版25-1、図版48-1）は、天井部はなだらかな張りを有し、口縁部は垂直に折り返されて端部で外反する。つまみは擬宝珠様を呈する。天井部外面には $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行う。口縁部径22.5cm、器高 4.5cm。（図版25-2）は、天井部外面に回転ヘラケズリを行い、つまみは扁平で丸味をおびている。

盤（図版25-3、図版48-2）

底部はほぼ平らで、口縁部にむけてたちあがる。口縁部は丸味をもってたちあがり端部で外反する。高台は貼り付けにより、細身で端部外側がややつきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行い、底部内面には不定方向のナデがみられる。口縁部径19.4cm、高台部径11.4cm、器高 3.4cm。

③③ 須衛43号窯出土遺物（図版25-4）

有台坏身（図版25-4）

底部はほぼ平らで、体部は直線的にたちあがるが中位で角度を変えて外反する。高台は貼り付けにより角ばって外に開く。底部外面には回転ヘラケズリを行い、底部内面中央部には不定方向のナデを行う。口縁部径19.8cm、高台部径16cm、器高 4 cm。

③④ 須衛42～49号窯出土遺物（図版25-5～8）

有台坏身（図版25-5・6）

（図版25-5）は、底部は平らで、体部は外反気味にたちあがり、口縁部でやや内側に折れる。高台は貼り付けにより丸味をおびて外に開く。底部外面には回転ヘラケズリを行う。口縁部径11.8cm、高台部径 8.2cm、器高 4 cm。（図版25-6）は、底部は中央部でやや盛りあがる。高台は貼り付けにより、端部の内側と外側とがつきだして凹面をなす。底部外面には渦巻状痕をナデ調整する。高台部径 8.5cm、現高 2 cm。

蓋（図版25-7）

天井部は低く扁平で、口縁部は内側ににぶく折り返される。つまみは擬宝珠様を呈する。天井部外面の $\frac{1}{2}$ までに回転ヘラケズリを行う。口縁部径16cm、器高 2.6cm。

甕（図版25-8）

胴部は口頸部直下で張り出して肩を形成する。口頸部は強く外反してたちあがり、端部は肉

厚で外側は凹面をなして内側に内彎する。口縁部径17cm、胴部最大径17.5cm、現高 7.5cm。

③4 須衛50号窯出土遺物（図版25-9、図版48-3）

坏身（図版25-9、図版48-3）

底部は扁平で、受部は小さくつきだす。口縁部は低く内傾して端部は直立気味となる。口縁部径 9.4cm、現高 2.5cm。

③5 須衛51号窯出土遺物（図版25-10-12）

坏身（図版25-10）

底部は扁平で、受部は小さくつきだす。口縁部は内傾してやや反り気味にたちあがる。口縁部径10.2cm、現高 2.1cm。

坏蓋（図版25-11）

天井部は丸味をおびる。口縁部はやや開き気味で、端部は内側に傾斜して凹面をなす。口縁部径 9 cm、現高 2.4cm。

平瓦（図版25-12）

凸面にはナデ調整が行われ、横方向に指の圧痕がみられる。凹面には布目痕が残り、端部には面取り状のヘラケズリを行う。現存長13cm。

③6 須衛53号窯出土遺物（図版25-13-15）

有台坏身（図版25-13）

底部は中央部がやや下がり、高台は貼り付けにより角ばって外に開く。底部外面には回転ヘラケズリを行う。高台部径13cm、現高 2.2cm。

瓶類（図版25-14）

胴部は張りを有してたちあがると思われる。高台は貼り付けにより、外側に丸味をおびてつきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行う。灰釉陶器である可能性もある。高台部径 8.1cm、現高 3.5cm。

灰釉陶器碗（図版25-15）

底部中央は高台端部まで下がる。高台は貼り付けにより、角ばった細身のもので外に開く。底部外面には回転ヘラケズリを行う。高台部径 9.2cm、現高 1.9cm。

③7 須衛59号窯出土遺物（図版26-1-4）

有台坏身（図版26-1・2）

（図版26-1）は、底部は張りを有し、高台は貼り付けによって端部外側が丸味をおびて強くつきだす。底部外面には渦巻状痕をナデ調整しており、中央部には「×」ヘラ記号がみられる。底部内面には不定方向のナデを行う。高台部径10.2cm、現高 1.5cm。（図版26-2）は、底部はほぼ平坦で、高台は貼り付けにより端部外側が強くつきだす。底部外面には回転ヘラケ

ズリを行い、底部内面中央部には1本の指頭によるナデがみられる。高台部径9cm、現高1.7cm。

甕（図版26-3・4）

（図版26-3）は、胴部の最下部である。外面には叩痕、内面には当具痕がみられる。また底部との接合面にも当具痕が残るが、これは本来、底部に残された当具痕が接合の際に陰刻されたものであろう。（図版26-4）は肩部の破片である。外面には叩痕、内面には当具痕が残る。当具痕の中心には「+」の刻目がみられる。

38) 須衛62号窯出土遺物（図版26-5~14、図版48-4~8）

灰釉陶器碗（図版26-5~8、図版48-4・5）

（図版26-5、図版48-4）は、体部は丸味をもってたちあがり口縁部にいたる。高台は貼り付けにより外に開き、端部は内彎する。口縁部径13.8cm、高台部径7cm、器高5cm。（図版26-6）は、底部は丸味をおびて序々に体部へと移行する。高台は貼り付けにより、細身で端部は外反する。底部外面には回転ナデ調整を行う。体部上部に灰釉が施される。高台部径7.6cm、現高4.5cm。（図版26-7、図版48-5）は、底部は丸味をおびて序々に体部へと移行し、口縁部はやや外反する。高台は貼り付けにより端部は内彎する。底部外面には回転ナデ調整を行い、体部の内外面には灰釉が漬け掛けにより施される。口縁部径16cm、高台部径7.8cm、器高4.9cm。（図版26-8）は、体部はなだらかにたちあがり、口縁部は外反する。高台は貼り付けにより低く外に開く。体部内外面には灰釉が漬け掛けにより施される。口縁部径16.4cm、高台部径8.6cm、器高5.2cm。

灰釉陶器皿（図版26-9~11、図版48-6~8）

（図版26-9、図版48-6）は、かすかに丸味をおびた底部から序々に体部がたちあがる。高台は貼り付けにより、ややつぶれた形で外に開く。底部外面には糸切り痕に回転ナデ調整を行う。体部内外面には灰釉が漬け掛けにより施される。口縁部径11.8cm、高台部径6cm、器高2.3cm。（図版26-10、図版48-7）は、ほぼ平らな底部から、体部は直線的にたちあがり口縁部に至る。高台は貼り付けにより外に開くが、かすかに内彎気味である。底部外面には回転ナデ調整を行う。体部内外面には灰釉が漬け掛けにより施される。口縁部径11.4cm、高台部径6.6cm、器高2.5cm。（図版26-11、図版48-8）は底部はほぼ平らで、体部には張りがみられる。口縁部は内側に丸味をおびる。高台は貼り付けにより、丸味のあるやや雑な整形である。底部外面には回転ナデ調整を行い、底部内面には重ね焼き痕が残る。体部内外面には灰釉が漬け掛けにより施される。口縁部径12.6cm、高台部径7cm、器高2.9cm。

灰釉陶器瓶類（図版26-12・13）

（図版26-12）は、底部は平坦で、胴部は丸味をおびると思われる。高台は貼り付けにより角ばって外に開き、接地面は凹面をなす。底部外面には回転ナデ調整を行う。胴部外面には灰釉が施される。高台部径8.2cm、現高2.8cm。（図版26-13）は、胴部は丸味をおびて強く張り出す。胴部外面には灰釉がかかる。胴部最大径21.2cm、現高15.3cm。

甕（図版26-14）

外面には刷毛目調整痕、内面には横方向のヘラナデ痕がみられる。焼成は須恵質であるが、胎土・調整技法は土師器と同一である。

(39) 須衛63号窯出土遺物 (図版27-1・2)

無台坏身 (図版27-1)

底部は平らで、体部は直線的にたちあがるが、全体にロクロ痕が顕著である。底部外面には渦巻状痕を粗くヘラケズリしている。底部径7cm、現高2.9cm。

盤 (図版27-2)

底部は下がり気味で、口縁部は直線的にたちあがる。端部は内側にやや丸味をもってつきだす。口縁部径20.2cm、現高3.5cm。

(40) 須衛65号窯出土遺物 (図版27-3~14, 図版49・図版50-1~3)

坏身 (図版27-3~5, 図版49-1・2)

(図版27-3, 図版49-1)は、底部にやや張りがみられ、受部は斜め上方につきだす。口縁部は低く内傾し、端部で外反気味となる。底部外面の $\frac{1}{2}$ まで回転ヘラケズリを行うが、中央部にはヘラ切り痕が残る。口縁部径10cm、器高3.9cm。(図版27-4, 図版49-2)は、底部は扁平気味で、受部は斜め上方につきだす。口縁部は内傾したのち垂直につきだすが、たちあがりは低い。底部外面下部にはヘラ切り痕が残る。口縁部径10cm、器高3.6cm。(図版27-5)は、底部は丸味を有すると思われる。体部はかすかに張りを有するが、ほぼ直線的にたちあがり口縁端部内側で器肉を減じ丸くおさめる。底部外面にはていねいなナデ調整が行われている。口縁部径11cm、器高推定4.8cm。

坏蓋 (図版27-6~8, 図版49-3・4)

(図版27-6, 図版49-3)は、天井部はロクロ痕が顕著であるが張りを有する。口縁部は天井部との間に明瞭な境界がなく、垂直気味に折り返したのち端部がわずかに外反する。天井部外面には中央部に渦巻状痕がみられ、その周辺部に回転ヘラケズリを行う。天井部内面中央部には1本の指頭によるナデ痕がみられる。口縁部径11.8cm、器高4.5cm。(図版27-7, 図版49-4)は、天井部はなだらかな丸味を有し、端部は丸くつきだす。内面のかえりは内傾するが、口縁部より外につきだす。天井頂部には乳頭状のつまみを付ける。天井部外面には $\frac{1}{2}$ まで回転カキ目調整を行い、さらにその周囲には粗い回転ヘラケズリを行う。天井部内面中央には1本の指頭によるナデ痕がみられる。口縁部径12cm、かえり部径10cm、器高4.2cm。(図版27-8)は、天井部はやや扁平気味で、端部は強くつきだす。内面のかえりは内傾するが、口縁部より外につきだす。天井頂部には乳頭状のつまみを付ける。天井部外面には $\frac{1}{2}$ まで回転カキ目調整を行い、さらにその周囲には粗い回転ヘラケズリを行う。天井部内面中央には1本の指頭によるナデ痕がみられる。口縁部径12cm、かえり部径9cm、器高3.6cm。

高坏 (図版27-9~14, 図版49-5~7・図版50-1~3)

(図版27-9, 図版49-5)は、坏部は扁平な底部から、口縁部が外反してたちあがり、端

部を丸くおさめる。底部と口縁部との境には稜を有し、その下方には段を有する。脚部は細く、裾部に移るにつれて徐々に開いていく。裾端部は鋭く下方につきだす。脚外面中位には2本一組の沈線が施され、下位にも1本の沈線が施されている。そしてその間には2段2方の透孔が配されているが、上段の透孔は内面まで貫通していない。口縁部径12cm、脚裾部径11cm、器高13.2cm。(図版27-10、図版49-6)は、やや大形の脚部で、裾部は徐々に大きく開いている。脚外面中位には2本一組の沈線が施され、下位には1本の沈線が施されている。そしてその間には2段3方の透孔が配されている。脚裾部径16cm、現高7.5cm。(図版27-11、図版49-7)は、細身の上部から徐々に裾部にむかって開いてゆき、端部は横につきだす。端部側面は凹面をなす。脚裾部径11.3cm、現高7.8cm。(図版27-12、図版50-1)は、ほぼ平らな底部には、周囲にかすかな段がめぐる。脚部は、円筒形を呈する上部から、裾部は強く開いて端部側面は凹面をなす。脚裾部径7.8cm、現高7cm。(図版27-13、図版50-2)は、脚部は低く、底部接合部より徐々に広がって裾端部は丸味をおびる。脚裾部径10.2cm、現高5.5cm。(図版27-14、図版50-3)は、脚部は低くつぶれた感を与える。裾部は強く横に開き、端部は丸味をもって折り返されている。平底部内面中央には1本のナデ痕がみられる。脚裾部径7.6cm、現高4.1cm。

(4) 須衛21~25号窯周辺採集遺物 (図版28-1・2、図版50-4・5)

高環 (図版28-1、図版50-4)

環部は浅く扁平で、口縁部は厚味を減じて丸くおさめる。環部外面には拓影にみられる線刻面が描かれているが、全体を知りえないためになにを描いたものかは不明である。底部内面中央部には不定方向のナデがみられる。口縁部径16.4cm、現高2.2cm。

四耳壺 (図版28-2、図版50-5)

胴部下部にはやや張りがみられ、肩は強く稜状につきだす。口頸部は強く外反してたちあがり端部を丸くおさめる。肩には2対の耳が付き、それぞれ径2mmほどの穿孔がなされている。胴下部には回転ヘラケズリを行う。口縁部径10.6cm、胴部最大径18.2cm、現高11cm。

4. 蘇原地区の出土遺物

(1) 蘇原1号窯出土遺物 (図版28-3~5)

小型鉢 (図版28-3・4)

(図版28-3)は、底部は平らで、胴部は張りを有してたちあがり、口頸部下で丸味をおびて張り出す。口頸部は短く、やや外反する。底部外面には糸切り痕が残る。口縁部径6cm、胴部最大径6.6cm、底部径4.2cm、器高3.9cm。(図版28-4)は、丸味をおびた胴部から、口頸部は強く外反する。口縁部径7cm、現高2.3cm。

甕 (図版28-5)

胴部の破片である。外面には叩痕が交錯してみられ、内面には当具痕が残る。また断面には幅4cmほどの粘土紐接合痕がみられる。

(2) 蘇原2号窯出土遺物 (図版28-6・図版29-1, 図版51-1・2)

平瓦 (図版28-6・図版29-1, 図版51-1・2)

(図版28-6, 図版51-1)は、平瓦の破片である。凹面には布目痕が残り、凸面には格子目状印痕が残る。端部はヘラケズリにより直截されている。(図版29-1, 図版51-2)は、平瓦の破片である。凹面には布目痕が残り、凸面にはヘラケズリ調整が行われる。端部はヘラケズリによる直截である。

(3) 蘇原6号窯出土遺物 (図版29-2~12, 図版51-3・4・図版52・図版53-1~4)

坏身 (図版29-2・3, 図版51-3・4)

(図版29-2, 図版51-3)は、浅く扁平な底部から受部が強く水平につきだす。口縁部は強く内傾し、上部で垂直気味となり端部はするどい。底部外面には渦巻状痕が残り、全体にロクロ痕が顕著である。口縁部径 9.6cm、器高推定 2.9cm。(図版29-3, 図版51-4)は、底部にはロクロ痕が顕著であるが深身で張りを有する。受部は強く斜め上方につきだす。口縁部は内傾し、端部は丸味をおびる。底部外面中央部には回転ヘラ切り痕が残り、その周囲には回転ヘラケズリを行う。底部内面中央部には広い範囲に不定方向の指ナデがみられる。口縁部径 11.8cm、器高 4cm。

坏蓋 (図版29-4~8, 図版52)

(図版29-4, 図版52-1)は、天井部は低く、なだらかに丸味をおびる。口縁部は浅い沈線によって天井部と限られ、内側が彎曲しながら端部を丸くおさめる。天井部外面にはていねいな回転ヘラケズリを行う。天井部内面中央部には広い範囲で不定方向の指ナデがみられる。口縁部径13cm、器高 3.9cm。(図版29-5, 図版52-2)は、天井部は平坦ながらも全体に張りを有する。口縁部は天井部から強く屈折し、端部は内側で丸味をおびてかすかに外反する。天井部外面には中央部を除くその周囲に荒い回転ヘラケズリを行い、内面中央部には広い範囲で不定方向の指ナデがみられる。口縁部径12.8cm、器高 4.4cm。(図版29-6, 図版52-3)は、天井部は低く扁平で、外面中央部には成形段階の円形粘土板が無調整で残る。口縁部は器高に比べて高く、天井部からわずかに折れて端部はかすかに内彎する。口縁部外面にはヨコナデが顕著にみられ、天井部内面中央には1本の指頭によるナデ痕が残る。全体に厚味のある雑なつくりである。口縁部径12.6cm、器高 4.5cm。(図版29-7, 図版52-4)は、天井部にわずかな張りがみられ、口縁部はその天井部からやや屈折したのち端部でかすかに外反する。天井部外面中央部は渦巻状痕無調整で、内面中央部には1本の指頭によるナデ痕が残る。口縁部径11.8cm、器高 4.1cm。(図版29-8, 図版52-5)は、天井部には強い張りがみられ、口縁部との境に低い稜がめぐるが、これは沈線によって相対的に際立たせた状態である。口縁部はやや内彎気味を呈し、端部は内側で厚味を減じてかすかに外反する。天井部外面には%までていねいな回転ヘラケズリが施され、内面中央部には不定方向の指頭によるナデ痕がみられる。口縁部径11cm、器高 5.1cm。本資料は、坏の蓋としての用途よりも、短頸壺類の蓋である可能性が高い。

高坏（図版29-9、図版53-1）

坏部と裾部を欠損するが、長脚高坏の脚部である。全体にロクロ痕が顕著で、中央部と裾部に2本1組の沈線がめぐる。本資料には透孔はみられないが、この他に2段の透孔を有する脚部の破片も出土している。現高 9.5cm。

広口壺（図版29-10、図版53-2）

底部を欠損するが、おそらく丸底を呈すると思われる。胴部は上位で最大に張り出し、2本の沈線をめぐらす。口縁部は垂直にたちあがり、上部で厚味を減じながらかすかに外反する。底部外面下部には回転ヘラケズリを行う。口縁部径12.6cm、胴部最大径14.6cm、現高 6.8cm。

脚付壺（図版29-11、図版53-3）

脚付壺類の脚部の破片である。裾部が大きく広がり、内彎して端部に至る。端部は外側に強くつきだし安定感がある。裾部外面上部には2本の沈線がめぐる。裾部径14.8cm、現高 4.4cm。本資料の他に、脚部に透孔を有する破片も出土している。

鉢（図版29-12、図版53-4）

底部を欠損するが、おそらく丸底を呈すると思われる。胴部は強く横に張り出し、口縁部との境には段を形成する。口縁部は内傾してたちあがり、端部でわずかに外反する。底部外面には回転ヘラケズリを行う。口縁部径17cm、胴部最大径19.2cm、現高 6.8cm。

5. 那加地区の出土遺物

(1) 那加2号窯出土遺物（図版29-13、図版53-5）

灰釉陶器壺（図版29-13、図版53-5）

底部は平坦で、体部は下部で直線的にたちあがって中位やや下方で角度を変えて口縁部に至る。口縁部はゆるく外反し、端部は丸くおさめる。高台は貼り付けにより、丸味をおびて外反気味に開く。底部外面には回転糸切り痕が残り、体部には全体にロクロ痕が顕著である。本資料は灰釉陶器に含まれるものと思われるが、施釉はなされていない。口縁部径12.6cm、高台部径7cm、器高 5.9cm。

(2) 那加3号窯出土遺物（図版29-14~18、図版53-6・7）

有台坏身（図版29-14~17、図版53-6・7）

（図版29-14）は、底部が強く張りを有すると思われ、体部は直線的にたちあがる。口縁部はやや内傾して端部で直立する。高台は貼り付けにより、断面は角ばって端部外側を面取り状に調整する。口縁部径13.8cm、高台部径10.2cm、器高 5cm。（図版29-15、図版53-6）は、底部中央部がやや盛り上がる。体部は丸味をおびてたちあがり、口縁部はかすかに外反する。高台は貼り付けにより角ばっているが、端部は外反気味である。底部外面には不定方向のヘラケズリを行い、底部内面には重ね焼痕が残る。口縁部径12.8cm、高台部径10.8cm、器高 3.9cm。（図版29-16、図版53-7）は、底部中央がかすかに盛り上がり、体部は直線的にたちあがる。口縁部は外反気味で、外面には強いヨコナデ痕が残る。高台は貼り付けにより角ばっているが、

端部内側が鋭くつきだす。底部外面には回転ヘラケズリを行い、底部内面中央部には不定方向のナデ痕がみられる。口縁部径18.8cm、高台部径14.6cm、器高 4.1cm。(図版29-17)は、体部はやや張りを有してたちあがり、口縁部は小さく外反する。高台は貼り付けにより角ばっているが、端部内側が強くつきだす。口縁部径19.6cm、高台部径16cm、器高 4.5cm。

盤(図版29-18)

底部はゆるやかにたちあがり、高台は貼り付けにより外に開き、端部は内傾して凹面をなす。底部外面には回転ヘラケズリを行い、底部内面中央部には不定方向のナデを行う。高台部径12cm、現高 2.7cm。

表1 美濃須衛古窯跡群分布調査表

| No. | 遺跡名 | 遺物種類 | 現状 | 備考 |
|-----|-------|------------------------------|----|-----------------------------------|
| 1 | 鵜沼1号窯 | 須恵器 | 消滅 | 栗木謙二氏談 |
| 2 | 鵜沼2号窯 | 須恵器 | 不明 | 栗木謙二氏談 |
| 3 | 鵜沼3号窯 | 須恵器 | 消滅 | |
| 4 | 鵜沼4号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・甕 | 消滅 | 窯洞古窯跡として発掘調査が行われた。一各務原市史考古巻 |
| 5 | 鵜沼5号窯 | 瓦 | 消滅 | |
| 6 | 鵜沼6号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・盤・高盤・甕・瓦 | 消滅 | 松田古窯跡群として発掘調査が行なわれた。一各務原市史考古巻 |
| 7 | 鵜沼7号窯 | 須恵器 | 不明 | 栗木謙二氏談 |
| 8 | 鵜沼8号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・短頸壺・広口瓶・円面碗・皿・鉢・甕 | | |
| 9 | 各務1号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・盤・壺・甕 | | 車洞古窯跡一各務原市史考古巻 |
| 10 | 各務2号窯 | 須恵器一坏蓋・高坏・罎・甕 | | 東山古窯跡群一各務原市史考古巻 |
| 11 | 各務3号窯 | 灰釉陶器一碗・皿・段皿・焼台 | 消滅 | |
| 12 | 各務4号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・壺・甕 | | |
| 13 | 各務5号窯 | 灰釉陶器一碗・皿 | | |
| 14 | 各務6号窯 | 灰釉陶器一碗・皿 | | |
| 15 | 各務7号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・高坏・甕 | | |
| 16 | 各務8号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・盤・長頸瓶・短頸壺・瓶・鉢・甕 | 消滅 | 各務原市史考古巻。昭和58年車洞古窯跡群として発掘調査が行われた。 |
| 17 | 須衛1号窯 | 中世陶器一四耳壺・壺・鉢・碗・瓶子・入れ子・片口碗・水注 | | |
| 18 | 須衛2号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・罎・鉢・平瓶・甕 | | 2基の窯体が接近している。 |
| 19 | 須衛3号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・盤 | 消滅 | |

| No. | 遺跡名 | 遺物種類 | 現状 | 備考 |
|-----|--------|---------------------------|----|--|
| 20 | 須衛4号窯 | 須衛器一坏蓋・高坏・盤・短頸壺・甕 | 消滅 | |
| 21 | 須衛5号窯 | 須衛器一坏蓋・坏身・盤・甕 | 消滅 | |
| 22 | 須衛6号窯 | 須衛器一鉢・広口瓶 | | |
| 23 | 須衛7号窯 | 須衛器一坏蓋・坏身・盤・三耳壺・甕・鉢・円面硯・甕 | | |
| 24 | 須衛8号窯 | 灰釉陶器一塊 | | |
| 25 | 須衛9号窯 | 須衛器一坏蓋・坏身・盤・鉢・短頸壺・壺・甕 | 消滅 | 地獄洞古窯跡として発掘調査が行われた。-各務原市史考古巻 |
| 26 | 須衛10号窯 | 須衛器一坏蓋・坏身・盤・長頸瓶・甕 | | |
| 27 | 須衛11号窯 | 須衛器一坏蓋・盤・甕 | | |
| 28 | 須衛12号窯 | 須衛器一坏蓋・坏身・盤・甕 | | |
| 29 | 須衛13号窯 | 須衛器一坏蓋・坏身・甕 | | |
| 30 | 須衛14号窯 | 須衛器一坏蓋・甕 | | |
| 31 | 須衛15号窯 | 須衛器一坏蓋 | | それぞれ窯体が露出しており附近に散乱している遺物はいずれの窯出土のものか判断できない。 |
| 32 | 須衛15号窯 | 須衛器一坏蓋 | | |
| 33 | 須衛17号窯 | 須衛器一坏蓋 | | |
| 34 | 須衛18号窯 | 須衛器一坏蓋・坏身・盤・広口瓶・描鉢・壺・平瓶 | | |
| 35 | 須衛19号窯 | 須衛器一坏蓋・坏身・短頸壺・平瓶・盤・甕 | | |
| 36 | 須衛20号窯 | 須衛器一坏蓋・坏身・盤・長頸瓶・甕 | | |
| 37 | 須衛21号窯 | 須衛器一坏蓋・坏身・盤・長頸瓶・甕 | 消滅 | 稲田山古窯跡群として発掘調査が行われた。その結果須衛器窯13基、灰釉陶器窯3基が検出された。-稲田山古窯跡群発掘調査報告書・各務原市史考古巻 |
| 38 | 須衛22号窯 | 須衛器一坏蓋・広口瓶・太頸瓶・壺・甕 | 消滅 | |
| 39 | 須衛23号窯 | 灰釉陶器一坏 | 消滅 | |

| No. | 遺跡名 | 遺物種類 | 現状 | 備考 |
|-----|--------|--------------------------------|----|---------------------------------------|
| 40 | 須衛24号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・盤・甕 | 消滅 | |
| 41 | 須衛25号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・盤・盤 | 消滅 | |
| 42 | 須衛26号窯 | 灰釉陶器一塊 | 消滅 | |
| 43 | 須衛27号窯 | 灰釉陶器 | 消滅 | 吉田英敏氏談 |
| 44 | 須衛28号窯 | 灰釉陶器 | | 吉田英敏氏談 |
| 45 | 須衛29号窯 | 不明 | | |
| 46 | 須衛30号窯 | 不明 | | |
| 47 | 須衛31号窯 | 不明 | | |
| 48 | 須衛32号窯 | 不明 | | |
| 49 | 須衛33号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・高坏・甌・鉢・甕 | | |
| 50 | 須衛34号窯 | 中世陶器一塊・片口鉢 | | |
| 51 | 須衛35号窯 | 灰釉陶器一塊 | | |
| 52 | 須衛36号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・盤・盤・太頸瓶・長頸瓶・甕 | | |
| 53 | 須衛37号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・盤・高坏・碗・盤・長頸瓶・短頸壺・甌・甕 | | |
| 54 | 須衛38号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・碗・壺・平瓶・甕 | | 2か所に分けたが灰原は連続している。37号窯の一部も含まれる可能性がある。 |
| 55 | 須衛39号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・碗・盤・甕 | | |
| 56 | 須衛40号窯 | 須恵器一盤・長頸瓶・短頸壺・甕 | | |
| 57 | 須衛41号窯 | 須恵器一坏蓋 | | |
| 58 | 須衛42号窯 | 須恵器一坏蓋・盤・甕 | | いずれも窯体が接近して露出している。 |
| 59 | 須衛43号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・盤・甕 | | |

| No | 遺跡名 | 遺物種類 | 現状 | 備考 |
|----|--------|-----------------|----|---|
| 60 | 須衛44号窯 | 不明 | | |
| 61 | 須衛45号窯 | 不明 | | |
| 62 | 須衛46号窯 | 須恵器一境 | | |
| 63 | 須衛47号窯 | 不明 | | |
| 64 | 須衛48号窯 | 不明 | | |
| 65 | 須衛49号窯 | 不明 | | |
| 66 | 須衛50号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・甕 | | |
| 67 | 須衛51号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・甕 | | |
| 68 | 須衛52号窯 | 不明 | | 窯体が露出 |
| 69 | 須衛53号窯 | 須恵器 灰釉陶器一境・皿 | | |
| 70 | 須衛54号窯 | 須恵器 灰釉陶器 | | 一部53号窯も含むが、灰原が連続して続いている。器種は須恵器が圧倒的であるが、灰釉陶器も含まれる。 |
| 71 | 須衛55号窯 | | | |
| 72 | 須衛56号窯 | | | |
| 73 | 須衛57号窯 | | | |
| 74 | 須衛58号窯 | | | |
| 75 | 須衛59号窯 | 須恵器一坏身・壺・甕 | 消滅 | |
| 76 | 須衛60号窯 | 灰釉陶器 | 消滅 | 吉田英敏氏談 |
| 77 | 須衛61号窯 | 瓦 | 消滅 | |
| 78 | 須衛62号窯 | 灰釉陶器一境・皿・瓶 | 消滅 | |
| 79 | 須衛63号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・甕・甕 | | |

| No. | 遺跡名 | 遺物種類 | 現状 | 備考 |
|-----|--------|-----------------------------------|----|---|
| 80 | 須衛64号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・埴・盤・皿・高坏・長頸瓶・平瓶・鉢・甕・成形具 | | 市立古窯跡群一各務原市史考古巻 |
| 81 | 須衛65号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・高坏・壺・横瓶・甗・陶錘 | 消滅 | 市立南古窯跡群1号窯一各務原市史考古巻 |
| 82 | 須衛66号窯 | 灰釉陶器一埴・皿・瓶・蓮華座 | 消滅 | 吉田英敏「岐阜県各務原市須衛出土の白瓷蓮華座」『古代文化』第32巻第8号昭和55年8月 |
| 83 | 須衛67号窯 | 中世陶器一埴 | | |
| 84 | 須衛68号窯 | 須恵器一坏身・埴・壺・鉢・甗・甕 | | 会本八幡神社古窯跡群2号窯一各務原市史考古巻 |
| 85 | 須衛69号窯 | 須恵器 | | 市指定史跡 会本八幡神社古窯跡群1号窯一各務原市史考古巻 |
| 86 | 須衛70号窯 | 瓦 | | 須衛高東古窯跡群一各務原市史考古巻 |
| 87 | 蘇原1号窯 | 須恵器一小壺・甕 | 消滅 | |
| 88 | 蘇原2号窯 | 瓦 | 消滅 | |
| 89 | 蘇原3号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・高坏・甕 灰釉陶器一埴 | 消滅 | 北山古窯跡群一各務原市史考古巻 |
| 90 | 蘇原4号窯 | 瓦 | | |
| 91 | 蘇原5号窯 | 須恵器 | 消滅 | |
| 92 | 蘇原6号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・高坏・広口壺・甗・甕 | 消滅 | |
| 93 | 蘇原7号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身 灰釉陶器一皿 | 消滅 | 加佐見山古窯跡群一各務原市史考古巻 |
| 94 | 那加1号窯 | 不明 | 消滅 | |
| 95 | 那加2号窯 | 灰釉陶器一埴 | 消滅 | |
| 96 | 那加3号窯 | 須恵器一坏蓋・坏身・盤・甕 | 消滅 | |
| 97 | 那加4号窯 | 灰釉陶器一埴・皿 | 消滅 | |
| 98 | 那加5号窯 | 須恵器 灰釉陶器 | 消滅 | 尾崎大平古窯跡群として発掘調査が行われた。一各務原市史考古巻 |
| 99 | 那加6号窯 | 灰釉陶器一埴 | 消滅 | 南洞古窯跡群一各務原市史考古巻 |

| No. | 遺跡名 | 遺物種類 | 現状 | 備考 |
|-----|--------|----------|----|-------------------------------|
| 100 | 那加7号窯 | 須恵器 瓦 | 消滅 | 小川弘一氏談 柄山古窯跡群－各務原市史考 古巻 |
| 101 | 那加8号窯 | | 消滅 | |
| 102 | 那加9号窯 | | 消滅 | |
| 103 | 那加10号窯 | | 消滅 | |

(註) 本表で用いられている窯の名称は個々の窯体を指すものではなく、窯体・灰原を含めた遺跡としての窯跡確認地点を指している。そのため同一地点から時期の異なる遺物の出土もみられるが、分布調査の段階では正確な時期や窯体数の把握などは困難な場合が多いためあえて細分は行わなかった。よって本表の1か所の窯跡には複数の窯体が存在する可能性が高い。

II 美濃須衛古窯跡群における須恵器編年

1 はじめに

美濃須衛古窯跡群は、古代美濃国における須恵器生産の中心地である。その大部分を市域に含む各務原市においても、現在までに確認されている103か所の窯跡のうち69か所は須恵器窯であり、他を灰釉陶器窯と中世陶器窯および瓦窯が占めている。そして今後とも精密な分布調査を継続すれば窯跡の数はさらに増加すると思われるが、それにしても美濃須衛古窯跡群全体に占める須恵器窯の圧倒的な割合にはほとんど変化はないと思われる。

今回ここで述べようとするのは、美濃須衛古窯跡群における須恵器の編年についてである。ところで美濃須衛古窯跡群についての調査研究は、他地域の窯跡の研究に較べて現状では遅れていると言わざるをえない。それは系統的な発掘調査例の少なさにもあらわれている。しかし昭和53年に行われた岐阜市老洞古窯跡群の発掘調査では、「美濃国」刻印須恵器を生産した窯の具体的な様相が解明されるとともに、8世紀前半代における美濃須衛古窯跡群の須恵器生産の実態が、昭和56年3月に刊行された同報告書により初めて公にされた^(註1)。また、各務原市において^(註2)、昭和49年に発掘調査が行われた稲田山古窯跡群の報告書が同じく昭和56年に刊行され、総数16基におよぶ須恵器窯、灰釉陶器窯からなる同古窯跡群の様相が知られるようになった。ついで昭和58年3月に刊行された『各務原市史』（考古・民俗編 考古）においては、松田古窯跡群、地獄洞古窯跡、尾崎大平古窯跡群などの発掘調査資料とともに、市域に所在する他の窯跡採集資料も収載され、ようやく美濃須衛古窯跡群の現段階における全体的把握が可能となってきたのである。

美濃須衛古窯跡群の須恵器編年を行うにあたっては、まず編年を構成する基準資料を抽出しなければならない。しかしながら現在までに発掘調査が行われた窯跡は、美濃須衛古窯跡群全体の窯跡数からみて決して多いとはいえないし、時期的にみてもかたよりがみられるのである。そのかたよりととは、ある意味で美濃須衛古窯跡群の性格を物語るものにほかならないのではあるが、ともあれ基準資料の抽出に際しては発掘調査によるものを第1として、その他に他地域の窯跡出土須恵器の編年観を参考として、発掘調査によらない窯跡採集資料のなかでも特に編年の時期設定に関して重要な意義を有すると思われる資料を基準資料として取り扱った。

発掘調査によって良好な資料を出土した窯跡には、稲田山古窯跡群、地獄洞古窯跡、尾崎大平古窯跡群、老洞古窯跡群があげられる。また、発掘調査によらないで重要な意義を有する資料を出土した窯跡には須衛65号窯（市立南古窯跡群第1号窯）、蘇原6号窯があげられる。

稲田山古窯跡群は、総数16基のうち13基が須恵器窯である。発掘調査された窯跡群は大きくみて第1・第2地点に大別される。須恵器窯のみ採り上げれば、まず第1地点では第1～第4号窯・第6～第8号窯までの7基があり、第2地点では第10号～第15号窯までの6基がある。このふたつの地点では、それぞれ窯体が接近して構築されており、窯体の切り合い関係や灰原土層の重複関係により各窯体の新旧関係が把握できる例がある。詳細な解説は

同報告書にゆずり、ここでは結論のみを述べることにする。まず第1地点では第1号窯→第2号窯への推移が知られ、その他は不明である。第2地点では第15号窯→第11号窯→第14号窯→第12号窯→第13号窯へと推移することが確認されている。また、第10号窯に関しては、第15～第14号窯よりも新しいことは判明しているが、第12号窯と第13号窯との関係については不明である。そこで明らかに新旧関係が判明している第1地点と第2地点での窯跡群を比較してみると、第2地点よりも第1地点のほうが新しい様式を持っていることが器種構成や須恵器の特徴から推測されることから、第15号窯→第11号窯→第14号窯→第12号窯→第13号窯→第1号窯→第2号窯の順で窯の構築が行われたことが推定できるとともに、各窯で生産された須恵器にも、当然ながらその関係が時期差として現われていると考えられるのである。以上のことから稲田山古窯跡群を通して、ある時期の須恵器の変遷を追求することが可能であり、さらに前後の時期に該当する窯跡を把握することができれば、稲田山古窯跡群の編年的位置づけはより強固なものとなりうる。

地獄洞古窯跡は、市域に所在する須恵器窯のなかで、現在知られている限りでは最北部にある。また発掘調査における所見でも周辺に他の窯跡は存在せず単独で築かれた可能性が高い。そのため同窯出土遺物には、最初に焼かれた須恵器と最後に焼かれた須恵器の間に、ある程度の時間の幅があることを考慮に入れても、その幅は異なる時期にわたるものではなく一時期におさまるものである可能性が高い。そして窯跡は多くの場合群として存在し、各々の灰原も明確に分離できない重複関係にあることが多いのであるが、その意味で地獄洞古窯跡の場合は、灰原出土遺物に異なる時期の異なる窯で生産された須恵器が混入している可能性はなく、純粋にある一時期の須恵器の様相が把握できるのである。

尾崎大平古窯跡群は、3基の窯体が検出され、そのうち第1号窯と第2号窯が須恵器窯である。そして第1号窯の構築時の排土が第2号窯の煙道部を埋めていることから、第2号窯→第1号窯へという新旧関係が知られる。ところで両窯から出土した須恵器を比較してみると、ほとんどその差異はみとめられないが、若干異なる点もみられる。そのため両窯は、各々の窯における時間差はあるもののそれはある一時期以内での型式差であるということがいえよう。よって両窯をさらに詳細に検討することにより、一時期以内における須恵器の変遷を把握することが可能になると思われるのである。

老洞古窯跡群については、岐阜市教育委員会より発行された報告書で、同窯跡群の持つ意義について詳細に述べられている。その中で今回の編年試案を作成するにあたって特に重要と思われる事項を述べてみると、第1には全国的にみても極めて希な「美濃国」刻印須恵器の存在と、同窯跡群で生産された須恵器と類似する須恵器が平城宮において出土していることから、同窯跡群の年代が8世紀前半代に比定されることである。また、刻印須恵器を生産した1号窯と刻印須恵器がみられない2号窯との間には明瞭な間層が存在することから、両窯の出土遺物を明確に分離することができ、尾崎大平古窯跡群の場合と同様にある一時期以内での型式差をとらえることができるのである。しかし、今回の編年にあたっては、同報告書においても述べられているように1号窯と2号窯の出土遺物には明確な変化がみられないことから同一型式とし

て取り扱った。

須衛65号窯については、発掘調査によって出土したものではないことが注意すべき点ではある。しかしながら、遺物を採集した時の状況を述べると、昭和49年の林道工事の際に窯体の一部が発見され、その時点ではすでに灰原は流失のため存在しなかったが、窯体は床面部分がほぼ完全に残っており、遺物はすべてその床面直上からのものであったという。このことから須衛65号窯（市史では市立南古窯跡群第1号窯）出土遺物はある時期の一括資料とみてもほぼまちがいはないと思われるのである。

なお、本書に収録した同窯の資料は、市史刊行以後に当時採集された資料のうち、新たに今回発見されたものである。よって市史に収録されている資料と、本書に収録した資料とは一括資料とみなしてよい。

蘇原6号窯は、美濃須衛古窯跡群出土須恵器のなかで、現在知られるかぎりでは最古期に位置する要素がうかがわれる。ただ採集資料としての資料的制約があるために、具体的な編年の位置づけは美濃須衛古窯跡群独自では困難である。そのため他地域の窯跡出土須恵器の編年観^(注3)を参考にして編年の位置づけを行った。

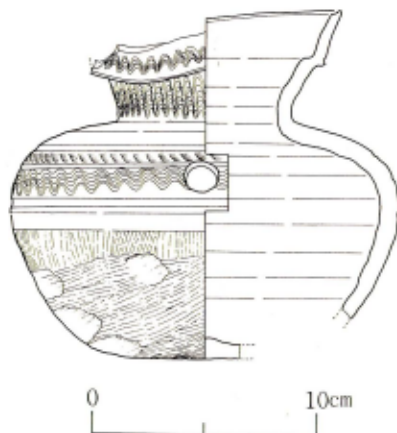
2 編年における時期設定

前項では編年に用いる基準資料を出土した窯跡の様相とその出土遺物について述べてみた。次にそれらを用いて設定した各時期の内容について付図を参照しながら述べる。

I 期

ここでいうI期とは、美濃須衛古窯跡群における須恵器の初源期として位置づけられる。

美濃須衛古窯跡群では、現在までのところ、このI期に属する窯跡およびそこからの須恵器の出土はみえていない。しかし各務原市須衛町宮東地内の水田より陶邑古窯跡群における中村浩氏のI型式2・3段階に対応すると考えられる大型甕が出土していることは、今後の美濃須衛古窯跡群の初源期を探索するうえで見のがせない資料である。



挿図1 須衛宮東地内出土須恵器甕

この甕（挿図1）は昭和46年頃、水田の耕地整理のとき用水路を掘削中に、現地表面から約30cm程地下の粘土層中より出土したものである。詳しい解説は市史に譲るが、焼成は良好で胎土は灰色を呈し自然釉が表面に付着している。また口縁部には焼成の際の歪みがみられ、胴部には注口部より底部にかけて斜めに亀裂が走ることから、直接的に窯跡関係遺物とは言えないにしても、窯で生産され不良品として廃棄されたものである可能性もある。現状ではそのどちらとも断定することは

できないが、今後大型甕と同時期に属する窯跡が発見される可能性を想定して、美濃須衛古窯跡群の初源期としてのⅠ期を設定しておきたい。

Ⅱ期

陶邑古窯跡群における中村浩氏のⅡ型式に相当するものである。Ⅰ期に引き続いて、美濃須衛古窯跡群では依然として不明な点が多い時期である。美濃須衛古窯跡群でⅡ期後半に属する窯跡は蘇原6号窯があげられる。蓋環の形態をみるかぎりでは、中村氏のⅡ型式4・5段階に相当するもので、現時点における美濃須衛古窯跡群での最古型式である。

Ⅱ期後半

蓋環では坏身と坏蓋が出土している。両者とも、法量・形態から2種類に大別される。坏身では、底部は浅く扁平で、受部が強くつきだして口縁部が強く内傾する器形と、やや大型で底部は深く張りを有するが、口縁部は前者ほど強く内傾しないで底部は回転ヘラケズリを行う器形とがある。坏蓋では、天井部は高くわずかな張りを有するが、天井部外面には明瞭な渦巻状痕がみられる器形と、やや大型で天井部は平坦気味ながらも強い張りがみられ、天井部と口縁部との境には沈線や横ナデを施し、天井部外面が回転ヘラケズリ調整や粘土円板無調整のままの器形とがある。この2種類の蓋環のうち坏身・坏蓋において前者としたものは、後者に比べて小型化しており、整形技法にも明らかな省略がみられる。そのため、あるいはⅡ期よりも新しい時期に位置づけるべきものであるかもしれないが、同時期における新しい器形の出現とも考えられるため、時期を分離することは避けた。

ここでは後者としたものが、美濃須衛古窯跡群のⅡ期後半の特徴を表わすものである。すなわち法量の縮小はいまだ顕著ではないが、形態・整形技法には明らかに省略化がみられるものである。

高坏は出土量が少ないために不明な部分が多いが、長脚高坏が主流を占めて次の時期に顕著となる器形の小型・多様化はいまだみられないようである。長脚高坏の脚部には長方形の2段透孔がみられるものとそうでないものがある。また高坏口縁部の破片では斜行歯状刺突文を施す例がある。

その他に壺・鉢類も出土しているが、整形は良好で坏類にみられるような退化現象はいまだうかがえない。

Ⅲ期

陶邑古窯跡群の中村氏の編年の場合と同様に蓋にかえりを有する坏蓋の出現をもってⅡ期と区分されるものである。現在この時期の基準となる窯跡には須衛65号窯と尾崎大平古窯跡群第1・2号窯がある。しかし、両窯のみで美濃須衛古窯跡群のⅢ期全体が解明できるわけではない。特にⅢ期の初源と終末の段階に関しては、いまだ末知の窯の存在が推測される。そのためここには須衛65号窯をⅢ期前半、尾崎大平古窯跡群をⅢ期後半に位置づけ、さらに尾崎大平古窯跡群第1号窯には同第2号窯より新しい要素がみられるとするととどめておく。

Ⅲ期前半

この時期には基準資料とした須衛65号窯の他に須衛33号窯、蘇原3号窯も含まれる。

蓋環の法量はⅡ期にみられた小型の蓋環と接近しており、器形の小型化がすすんでいる。坯身は、底部には平坦な面がみられず、張りもかすかなものとなっている。蓋受のたちあがりは強くなるが、口縁部のたちあがりは低く、Ⅱ期後半に較べて強く内傾している。底部外面に回転ヘラケズリを行うものとそうでないものがみられる。また、この時期に無台坯身とも呼ぶべき器種が出現している。おそらくかえりを有する蓋とセットをなすものと思われる。

坯蓋はⅡ期からの系統に属する蓋と、この時期に出現し、Ⅱ期とⅢ期を区分する根拠とした、かえりを有する蓋の2種類がみられる。前者は、坯身の場合と同様にⅡ期後半に較べて小型化しており、やや天井部に張りがみられるものの頂部の平坦部分が狭く、渦巻状痕が残る。全体にクロ痕が顕著で、天井部と口縁部との境は明確ではない。天井部に荒い回転ヘラケズリを行う。かえりを有する蓋のつまみは整形の良好な乳頭状のもので、天井部全体に張りがみられ、外面に回転カキ目調整を行ったのち周囲を回転ヘラケズリするというやや手のこんだものである。かえり部は強く口縁部より下方につきだし古式な様相が感じられる。

高環は、Ⅱ期に較べて小型・多様化が顕著なことが、かえりを有する蓋の出現とともにⅢ期を設定した根拠のひとつである。しかし美濃須衛古窯跡群のⅡ期後半における高環の様相は、資料不足のため不明な点が多い。そのため高環にみられる小型・多様化の現象は今後の課題としておきたい。

高環にはⅡ期後半にみられた長脚2段透孔を有するものが存在する。ただし透孔には2段2方向のものが多く、2段3方のは大型の脚部のみにみられる。坯部には文様は施されていない。

その他甕・甕などの器種も出土しているが、甕については口縁部のみで全体を知りえない。甕についても口縁部の出土が主体であるが、その口縁部は外面に従位の櫛描文を施すか、あるいは無文のままの状態であり、おそらく波状文などは行われなくなっているものと考えられる。

Ⅲ期後半

この段階に至って、美濃須衛古窯跡群は急に窯数を増加する。現在確認されているものを掲げると各務2号窯、各務7号窯、須衛4号窯、須衛41号窯、須衛50号窯、須衛51号窯、蘇原3号窯、岐阜市朝倉古窯跡群、そしてこの段階の基準資料とした尾崎大平古窯跡群（那加5号窯）がある。蘇原3号窯は出土遺物からみてこの段階にも生産を行っていたようである。

尾崎大平2号窯期

蓋環はⅢ期前半に引き続いて2種類の蓋環が存在する。まずⅡ期後半からの系統を引く蓋環では、Ⅲ期前半のものと比較すれば、坯身については、Ⅲ期前半に較べて口縁部のたちあがりに鋭さがなくなり、小型・扁平化が進んでいる。特に口縁部のたちあがりが極端に低いものとして、そうでないものがみられ、後者をⅢ期前半からの流れととらえ、前者を新しい要素ととらえることもできる。坯蓋は2種類に大別される。それはⅢ期前半に較べて器高が低く扁平なものとなっており、天井部には渦巻状痕が残るものと、新しくこの段階に出現するもので、やや小型

化がみられ、天井部には渦巻状痕が残り、天井部と口縁部の境には明瞭な角度の変換がみられるものである。

次にⅢ期前半に出現したかえりを有する蓋環は、この段階に入ってさらに盛行するようである。特に蓋は法量によって最低3種類に分類することができる。大型は口径約16cm、中型は口径約12cm、小型は口径約10cm前後を示し、つまみの形態も擬宝珠状、乳頭状など様々であるが、概して大型・中型品には擬宝珠状、小型品には乳頭状のものが多くみられる。内面に有するかえりは、口縁部より下方につきだすものは少なくなる。そして全体に整形は雑になっている。かえりを有する蓋とセットをなす坏身については蓋の変化と対応するような良好な資料は少ない。しかしながらⅢ期前半に蓋とともに出現した無台坏身の系統はこの段階に入って数量的には蓋受をもつ坏身を圧倒している。その特徴をあげれば、底部はおおむね丸底を呈して丁寧なナデ調整が行われており、わずかに渦巻状痕の跡がみられる程度のものである。そして体部は底径に較べて深く、口縁部に移るにつれて外反するものがほとんどである。

高環は、Ⅲ期前半に始まったと思われる高環の小型・多様化が、この段階に入って最も完成度の高いものとなる。それは特に小型品における整形の緻密さに表われていると言える。

尾崎大平1号窯期

蓋環では、環蓋はやはり2種類のがみられる。まず2号窯期からの系統を引くもので、天井部と口縁部との境に明瞭な角度の変換を有する環蓋が、他の環蓋を数量的に圧倒している。それと対応するかのように坏身でも口縁部のたちあがりか極端に低いものが多数を占めるようになる。おそらくこの段階以降Ⅱ期後半からの系統を引く蓋環は消滅するのではないだろうか。

かえりを有する蓋環については、前段階との明瞭な差はあまりみられない。表現を変えるならば停退気味といえるのかもしれない。

環蓋についてはこの段階に新しい器種が出現している。口縁部を折り返して、つまみは扁平な擬宝珠状を呈するもので、次のⅣ期に環蓋の主流を占めるものである。口径に較べてつまみの規模がやや大きく、天井部は傘状に張りを有して開くものが多い。口縁部の整形は全体に甘い。しかしながらこの杯蓋とセットをなすと思われる有台坏身の出土は明確でないため、この新しい器種については十分に検討することができない現状にある。

高環は前段階と基本的な変化はなく、高環の小型化は依然続いているように思える。しかしながら前段階にみられた特に小型化したものは、この段階ではみられなくなる傾向がうかがわれるが、資料が少ないために断言は避けたい。

また、環蓋と同じく高環についても、この段階に新しい器形が出現している。やはり次のⅣ期に継続するものである。

甌は胴部のみのため詳細は知りえないが、整形は粗雑化しており、注口部は貼り付けによらず穿孔のままである。そしてこの段階ではいまだ底部に高台を付けることはないようである。

その他、Ⅲ期後半には、台付長頸瓶と新しい大型の平瓶が出現していると思われるが、出土状態が明確でないためにここではふれないでおく。

Ⅳ期

美濃須衛古窯跡群がⅢ期後半に引き続いて窯数のうえでも、器種的内容についてもさらに飛躍的發展をみせる時期である。

現在までに確認されている市内69か所の須恵器窯のうち、59か所がこの時期に属する。まさに美濃須衛古窯跡群の性格を特徴づける時期と言っても過言ではない。

この時期に属する窯跡の発掘例は、稲田山古窯跡群（須衛21・22・24・25号窯）、地獄洞古窯跡（須衛9号窯）、寒洞古窯跡群（各務8号窯）、松田古窯跡群（鶴沼6号窯）、窯洞古窯跡（鶴沼4号窯）、岐阜市老洞古窯跡群がある。そのなかで特に良好な資料がえられた稲田山古窯跡群、地獄洞古窯跡、岐阜市老洞古窯跡群の3窯からの出土遺物を、ここでは編年の基準資料として使用した。なお、寒洞古窯跡群については、昭和58年に発掘調査が実施されたが現在整理途中のためにその内容については十分に把握できていない。そのためここでは同古窯跡群についてふれることは差し控えたい。

Ⅳ期は、現在の段階では、3小期に区分することが可能である。そしてそれぞれの小期は各窯跡の出土遺物の内容から、さらに前後半期に細分される。

Ⅳ期は、その設定基準として、Ⅲ期にみられたかえりを有する環蓋の消滅が第1にあげられ、第2には口縁部を折り返す環蓋と、それとセットをなす有台坏身の盛行があげられる。またその他にⅢ期にはみられなかった多くの新器種もこのⅣ期に出現しており、そうした意味では須恵器における古墳時代的な要素が払拭された時期である。

Ⅳ期 第1小期

この小期は前半を地獄洞古窯跡、後半を岐阜市老洞古窯跡群1・2号をもってあてられる。Ⅲ期後半にみられた窯の増加現象の延長上にあり、美濃須衛古窯跡群のほぼ全域に窯が出現した時期である。

第1小期に属する窯跡をあげれば、発掘調査が行われた窯跡として地獄洞古窯跡、松田古窯跡群、窯洞古窯跡、岐阜市老洞古窯跡群1・2号窯がある。そして採集資料からみて第1小期に属すると考えられる窯跡には、鶴沼8号窯、各務2号窯、各務4号窯、須衛2号窯、須衛10号窯、須衛11号窯、須衛18号窯、須衛19号窯、那加3号窯、岐阜市朝倉古窯跡群などがある。その他に市史において稲田山北古窯跡群（須衛49～74号窯）出土として収録されている須恵器の中にも第1小期に属するものがみられる。

この時期における須恵器の特徴としては、Ⅲ期後半にみられた器種がいまだ数種残存するが、Ⅳ期全体を通して盛行する器種のほとんどがこの小期に出現している。しかし、それらはすべての窯跡出土資料にみられるのではなく、各窯毎によって器種構成にある程度のばらつきがあるように思える。また須恵器の器形についても第Ⅱ小期以降と較べると器肉が厚く各部位の調整も丁寧ながらも鋭さはあまりみられない。この傾向は特に第1小期前半に著しく、後半に至ってやや解消されてくるのではあるが、それでも第2小期以降との差は歴然としている。

第1小期前半

坏身には、無台坏身と有台坏身がある。無台坏身には、大型の器形と小型の器形とがみ

られるが、大型の器形はこの時期に出現するものである。また小型の器形にも、底部が丸底を呈して、体部が外反気味にたちあがるものと、底部が平底に近く、体部は直線的にたちあがり、前者に較べて身の浅いものがある。このうち前者は、Ⅲ期に出現したかえりを有する環蓋とセットをなす環身の系統を引くものと考えられる。底部の調整は回転ヘラケズリ、ナデ、無調整の3種類が基本的であるが、無調整のままのものは底部が平底に近いもののみみることができる。

有台環身は、Ⅲ期後半の尾崎大平1号窯期に出現する可能性があることを先に指摘したが、Ⅳ期に入ってその存在が明確となる。大ぶりのものが大部分を占めて、底部が丸味をもつものが多く、中には高台よりも下がるものがみられる。底部の調整は丁寧な回転ヘラケズリであり、高台は器形に較べて細身のものが多く、整形に鋭さはみられない。有台環身はその形態から3種類に大別される。

環蓋はⅣ期に入るとかえりを有するものはまったくみられなくなる。そしてⅢ期後半の尾崎大平1号窯期に出現した口縁部を折り返す器形のみとなる。また、有台環身の口径と対応するようにやはり3種類のもがみられるが、概して張りをもつものの直線的に開くものが多く、口縁部の整形には鋭さはみられない。つまみは扁平な擬宝珠状のもので、口径に較べて規模の大きいものが多い。

高環はⅢ期にみられた器形は消滅し、尾崎大平1号窯期に出現した盤状の高環がみられる。また、脚部の高い器形も出現しているが出土量が少なく詳細は不明である。

盤もⅣ期に入って新しく出現する器種である。器形の変化はあまりみることはできない。しかしながら高台の形態には当初から様々な変化が加えられており、同時期の有台環身の高台と比較するとその差は著しいものがある。

台付長頸瓶は、胴部がややずんぐりとした器形で、口頸部は上部で強く外反して開く。そして口頸部の長さは胴部の長さに近づいている。

鉢は、口縁部が内彎する小型の鉢と、口頸部を有する鉢が出現する。小型の鉢は、無台環身と基本的な成形法に差異はないと思われるが、口縁部を内彎して調整しており、身の深いものと浅いものとに大別される。口頸部を有する鉢は身の深いものと浅いものとみられるが、両者とも口径が胴部最大径とほぼ均しいかあるいはそれを上回るものが大部分を占めている。

平瓶は把手付のものが出現している。把手の整形にヘラケズリはまだみられない。口径が胴部径の約 $\frac{1}{2}$ ほどの規模で、そのためか全体に扁平な感を与えている。

第1小期後半

岐阜市老洞古窯跡群1・2号窯をこの時期の基準資料とした。3号窯については、1・2号窯に先行することは明らかであるが、出土資料が少なく詳細な検討は不可能であるため今回の編年からは一応除外することにした。老洞古窯跡群は、1号窯が「美濃国」刻印須恵器を生産した窯として著名であり、官窯的性格が考えられている。そのためか出土遺物には特殊なものや、その後の美濃須衛古窯跡群で生産された特徴的な須恵器の祖型とみなされるものが多くみられる。

ところで、前半に位置づけた地獄洞古窯跡と老洞古窯跡群1・2号窯との先後関係は、いま

だ明確ではない。両窯の先後関係を追求する手段は、出土遺物の型式学的考察によるしか現在のところ方法がないのであるが、両窯の出土遺物を比較すると共通する器種には蓋環類、脚の長い高環、長頸瓶、鉢類、平瓶、甕類があり、地獄洞古窯跡にあって老洞古窯跡群1・2号窯にないものには、盤状の高環、高台を有する盤、甗がある。そして地獄洞古窯跡にはなくて、老洞古窯跡群1・2号窯にみられるものには、底部外縁に稜を有する坏身、台付長頸瓶D類、水瓶、皿類、提瓶、横瓶、金属器写しの境・蓋類、大型盤類、甗、播鉢、壺類などがある。このようにざっと器種をあげてみただけでも老洞古窯跡群1・2号窯には地獄洞古窯跡以上に新器種の出現やその多様さがうかがわれる。しかしながら、地獄洞古窯跡にはみられないⅢ期以前の名残りに、甗の多量の出土があり、逆に地獄洞古窯跡にみられるⅢ期以前の名残りに盤状の高環がある。また老洞古窯跡群1・2号窯にみられない地獄洞古窯跡出土の新器種としては高台を有する盤がある。

もとより窯跡出土遺物は焼成に失敗した不良品であり、出土した資料がそのまま当時製作された器種のすべてをあらわしているとはいえないことから、大局的にみた全体の傾向として地獄洞古窯跡が老洞古窯跡群1・2号窯に先行する性格を有していると判断してもさしつかえないかも知れない。しかしながら、老洞古窯跡群について考えられる官窯という特殊な性格から、地獄洞古窯跡と同時期にあって型式的に進んだ段階の製品を製作していたということも考えられるのである。いずれにせよ現在の状況ではそのどちらとも判断しがたい。ただ老洞古窯跡群1・2号窯からの出土資料に、その後のⅣ期第2小期以降の資料と直接的につながる要素がより強く感じられることから、現段階ではⅣ期第1小期後半に老洞古窯跡群1・2号窯の出土資料をあてることにした。

坏身には無台坏身と有台坏身とがあり、新器種として底部外縁に稜を有する有台坏身が出現する。特にこの稜を有する坏身は、美濃須衛古窯跡群においても前後にみることでできない器形であり、極めて特殊なものである。

無台坏身は、底部が丸底を呈し深身で体部が外反気味に開くものはこの段階までみられる。また、大型の無台坏身はこの段階を境にして序々に消滅にむかうようである。

有台坏身にはやや変化がみられる。まず、この段階に出現し、現状では前後に類をみない底部外縁に稜を有する有台坏身の出現である。次いで有台坏身の法量における分化が前半期に較べて進んでいる。それは、全体的にみて小型の器形が増えつつあるという変化である。

環蓋は、有台坏身の小型化に対応するかのようになり、やはり前半期に較べて小型の器形が増加している以外には、目立った変化はみられない。

高環は、脚の長い高環がみられるが、Ⅲ期後半からⅣ期第1小期前半までみられた脚の短い盤状の高環は消滅すると思われる。

盤は、前半期に出現した器形は出土しておらず不明である。しかしながら、次の第2小期以降に盛行する、台部を有する盤の祖形と思われる器種が2号窯から出土している。

台付長頸瓶についてはあまり変化はみられないが、しいて言うならば、口頸部が細身のものが多く、口縁部で急に開くものがみられるが、前半期の台付長頸瓶の出土例が少なく、十分な

検討は加えられない。

口縁部が内彎する鉢は、前半期に較べて出土量が増加しており、器形も深身のもの少なくなる傾向がうかがえる。そして、器肉の厚さも比較的薄いものが増加しているようである。

最後に第1小期後半を特徴づけるものとして、金属器を写したと思われる埴と蓋の出現があげられる。埴は体部に沈線をめぐらせた稜がみられ、口縁部は外反している。蓋は環状のつまみに特徴をもち、天井部に段を形成している。両者とも非常にシャープなつくりである。

Ⅳ期 第2小期

この時期は、前半を稲田山古窯跡群第15号窯を基準資料とし、後半を稲田山古窯跡群第14号窯を基準資料とする。第1小期まで残存していたⅢ期後半の影響は、この第2小期に入るとまったくみられなくなる。そして第1小期で成立した器種に新たに若干の新器種が加わり、安定した生産が行われた段階として位置づけられる。

第Ⅱ小期に属する窯跡を、具体的にあげることは現状では困難である。それは、この時期には第1小期の影響と次の第3小期にあらわれる特質とが混在しており、いわば第1小期の影響下にありながらも、次の第3小期の準備期間的な性格が想定されるからである。言葉を変えて言えば、Ⅳ期に入って一層顕著となった美濃須衛古窯跡群の発展性には、ある種の飛躍的な性格がみられた。そこには在地独自の発展性に加えて、何らかの外的要因が存在したことが推測されるのである。しかしながら第2小期に至ってそれらの飛躍的な性格は徐々に融和されるようになり、第1小期までにみられたような窯の急激な増加は衰えたと思われるものの、須恵器生産自体には安定した傾向がみられるのである。窯の増加現象の衰退を裏づける根拠として、鶴沼地区ではⅣ期の第1小期以降に継続する窯がみられないことをあげたい。またその窯跡の内容についても、松田古窯跡群は2基のみで構成され、窯洞古窯跡は単独1基である。同様に須衛地区に所在する第1小期の地獄洞古窯跡も単独1基である。それらの状況から、第1小期における急激な窯の増加が第2小期には継続していないことが推測されるのである。

次に須恵器生産の安定を想定する根拠としては、まず第2小期に入って新たに新器種が出現することがあげられる。それは双耳環と長頸瓶である。また、双耳環と長頸瓶の出現がこの小期を第1小期と区分した根拠でもある。第2には、第1小期後半にみられた蓋環類の多様な内容が、第2小期に入っても衰えていないことがあげられる。

このように第1小期に較べてやや小康状態と思われる第2小期ではあるが、生産内容については逆により深化した時期ととらえることができる。

Ⅳ期 第2小期前半

環身には無台環身と有台環身とがある。また、この時期から双耳環が出現する。

無台環身では、底部が丸底を呈し、深身で体部が外反気味に開く器形は消滅している。そして大型の無台環身も若干は存在するが、この期を境にしてやはり消滅すると思われる。

無台環身の主流を占めるのは、小型で底部が平底を呈し、外面に渦巻状痕が明瞭に残り、体部は直線的にたちあがる器形である。

有台坏身は、第1小期後半に引き続いて器形に多様性がみられる。そして底部が高台より下がるものも大型品にみられる。しかしながら第1小期後半と異なる点は、高台の貼り付け位置がやや中央部に近づくことと、高台の整形に角ばったものが多くみられるようになることである。

坏蓋は、有台坏身と同様にその器形に多様性がみられるところは第1小期後半と変りはない。しかしながら、つまみの形態が、扁平なものからやや丸味をおびたものとなり、口径に対してもその規模が小さくなってきている。そして全体に天井部が丸味をおびて、口縁部を強く折り返すものが多くみられる。

第1小期後半に出現した金属器写しの蓋は、この時期にも継続してみられる。だが全体に鋭さがなくなり、口径にもばらつきがみられることは、初期の徹底した模倣段階から、一步その規制が崩れつつある状況にあると言えよう。埴については出土例がないために不明であるが、おそらく同様な傾向にあると考えられる。

高坏は、脚部に長方形の透孔を入れ、口縁部や脚裾部を強く折り返すようになる。この段階以降、美濃須衛古窯跡群では高坏の脚部に透孔を入れることが主流となる。

盤は、第1小期前半で出現した高台を有する器形がみられる。口径が大型と小型に分化している。第1小期後半に出現した台部を有する盤については、出土例がないため不明である。

長頸瓶がこの時期から出現する。胴部は上半で強く丸味をもって張り出し、平坦に近い肩部をなす。口頸部は3段接合により、口縁部は強く折り返されている。

台付長頸瓶については第15号窯に出土例がないため、第15号窯の次に構築され、なお第2小期前半に属する第11号窯からの出土資料について述べる。肩の屈曲部は第1小期に較べてやや鋭くなり、器形が小型化しているためか口頸部の長さも短かくなっている。口頸部は強く折り返されている。また口頸部と肩部との接合位置には凸帯がめぐっている。

本資料はこれ以前のものや、この段階以降のものと比較してもやや特殊な部類に属する器形である。しかしながら、美濃須衛古窯跡群においては、長頸瓶の出現以降も、第1小期の台付長頸瓶の系譜を引く器形が製作され続けている。この台付長頸瓶がまったく消滅するのは、美濃須衛古窯跡群におけるV期以降のことであると考えられることは、今後の美濃須衛古窯跡群研究における問題点のひとつである。

鉢では、口縁部が内彎する小型の鉢についても、第11号窯からの出土資料について述べれば、第1小期後半にみられたシャープさはなくなり、全体に丸味をおびたものになっている。

口頸部を有する鉢は、第1小期後半に較べて大きな変化はないが、口縁端部を垂直気味に角ばって成形するものが多くみられる。

第2小期 後半

坏身には無台坏身と有台坏身がある。大型の無台坏身はまったくみられなくなり、第2小期前半で主流となった平底で底部に明瞭な渦巻状痕がみられ、体部が直線的にたちあがる小型の器形のみとなる。

有台坏身は、第2小期前半と較べてあまり変化はみられないが、小型で身の浅い器形が多く

なりつつあるということが推測できるかも知れない。しかしながら出土資料が限られており速断はできない。高台はほとんどのものが中央部寄りとなり、高台の調整も角ばったシャープなものが多い。

環蓋にも大きな変化はみられない。ただつまみの成形が、前半期に較べてより小形になっている。

高坏は、この段階より口縁部を強く折り返す器形と、口縁部端部を直截する器形が出現している。前者は、第1小期後半からの系統を引くものと考えられ、後者は次の第3小期に至ってさらに盛行をみるものであることから、第2小期後半に出現した第3小期的な要素とも考えられる。どちらも長脚で三方に長方形の透孔を穿孔している。前段階の高坏に較べれば、やや小型化していることがうかがえる。また、それらとは別に、大型で口縁部をにぶく折り返し、脚部に透孔を穿孔しない器形もみられる。この器形は次の第3小期にもみられ、第1小期後半の高坏ともよく類似することから、あるいは第1小期後半の高坏からの直接的な流れを想定することも可能であろう。

盤は、高台を有する器形と、台部を有する器形との2種類のものがみられる。前者は第1小期前半に出現した器形であり、後者は第1小期後半に出現した器形である。高台を有する盤は、第2小期前半との差はみられないが、台部を有する盤は、台部に円孔を有し、口縁部を強く折り返し、その折り返した部位が稜状となるなど、第1小期後半との差が著しいために、あるいは前段階の第2小期前半にその間の差を埋める資料が存在しているのかもしれない。

台付長頸瓶には、第2小期前半との差はみられないと思われる。長頸瓶については、良好な資料がないために不明であるが、前後の関係から推測すれば、やはりほとんど変化はないと思われる。

鉢については口縁部が内彎する小型の器形が若干出土しているが、全体に出土量が減少する傾向がうかがえる。

平瓶は把手付きの器形が出土している。把手部分はヘラケズリ調整がなされ、口頸部は第1小期のものに較べて口径が小さく、端部も角ばっている。また、たちあがりもかすかに反する程度である。

Ⅳ期 第3小期

この時期は前半を稲田山古窯跡群第12号窯、後半を稲田山古窯跡群第13号窯をもってあてられる。

あらゆる意味で美濃須衛古窯跡群の成熟期として位置づけられる時期である。また、第2小期にはみられなかった窯の地域的拡散がふたたび行われた時期でもあり、美濃須衛古窯跡群の縁辺部でこの時期に属すると確認される窯跡には、須衛3号窯、須衛63号窯、須衛64号窯（市立古窯跡群）、各務1号窯（車洞古窯跡群）、各務8号窯（寒洞古窯跡群）などがあげられる。しかしながら鶴沼地区には窯跡がみられないことから、第1小期までにみられるような急激な発展期ではなく、ある程度の安定した発展期と推測される。それはこの時期に生産された須恵器の特徴についてもうかがえるのである。この時期に新たに出現する器種は片口鉢のみであり、

他に特徴的な器種は出現していない。それよりも、この時期を特徴づけるものは、第2小期後半までにみられた蓋坏類を中心とする技術的退化現象と、それと相反するかのような須恵器の各部位における様式化、装飾過多の盛行である。

言い換えれば、須恵器の基本的製作技術の行きづまり、あるいは退化は、新たな技術大系の導入をもって解消されるべきものであるが、この時期にはそれが行われなかわりに、前小期までに成立した須恵器の器種的・器形的特徴を最大限深化させることにより、その矛盾を解消しようとしたかのような印象を受けるのである。そしてその傾向は、高坏・盤において特に著しいのである。だが、別の見方をするならば、須恵器の日常雑器的な器種と、消費地において特別な用途に用いられる器種とが、整形技法のうえでも明確に分離されたということかも知れない。

第3小期 前半

坏身には無台坏身と有台坏身とがある。無台坏身は資料が少なく詳細は明らかではないが、次の第3小期後半の様相を参考にすれば、第2小期以前と比較してやや小型化して身の浅いものとなる。そして整形には粗雑さがみられ、底部外面の渦巻状痕もほとんど無調整のまま残されると思われる。

有台坏身には、小型の器形が主流となりつつある状況に変化はないと思われる。その他第2小期後半との差異はあまりみられない。

坏蓋は、やはり第2小期後半との差異はあまりみられない。ただつまみの規模がさらに小さいものがふえる傾向にあると言えよう。金属器写しの蓋は、つまみの部分に強い様式化がみられる。また口縁端部を直截する器形も出現する。

高坏は、第2小期後半で出現した、口縁部を折り返さずに、端部を直截する器形と、口縁部を強く折り返す器形とがみられる。前者は特に口縁端部を上下につまみだすように鋭い調整を加えており、後者は坏部が板状に平坦なものとなっている。

盤は、第2小期後半で出現した台部を有する器形と、高台を有する器形とがみられる。前者の台部にみられる透孔の形態には、円孔の他に十字孔、2連円孔などが出現し、また透孔の間にヘラ描文様を施すようになる。また台部に透孔を有しない例もみられる。口縁部の特徴としては、口縁部を強く折り返し、端部を角ばって調整するものや、高坏と同様に口縁部を折り返さずに直截し、端部を上下につまみだすように鋭い調整を加えたものがあげられる。

高台を有する盤は資料が少ないのであるが、口縁部を強く折り返し、端部を角ばって整形している点に台部を有する盤と共通する要素がうかがえる。

台付長頸瓶は、胴部が直線的となり肩部が鋭いものとなる。口頸部の長さが短かく、端部はラッパ状に開く。

長頸瓶は、依然として肩が丸味をおびて強く張り出し、口縁部を垂直に折り返している。また、口頸部と胴部の接合部に凸帯をめぐらせている。

鉢は、この段階で片口を有する器形が出現する。また、口頸部を有する鉢には、小型の器形がみられる。

第3小期 後半

坏身には無台坏身と有台坏身とがある。無台坏身は小型で比較的身の浅いものが多く、底部外面の渦巻状痕は無調整のままであるが、なかにはヘラケズリによって渦巻状痕を消しているものもみられる。

有台坏身は、やはり身の浅いものが多く、底部外面に回転ヘラケズリを行うものや、行わないで渦巻状痕を残すもの、あるいは不定方向にヘラケズリを行うものなどがある。高台は底部の中央寄りに貼り付けられ、角ばって鋭い整形を行うものが多い。

双耳坏もこの段階には依然としてみられるが、有台坏身と基本的には変化はない。

环蓋は、この段階に多様化するようである。特に口縁部を直截する器形が、この段階を一層印象づけている。しかしながら基本的な整形技法は停滞しているのかもしれない。それは従来からの环蓋にみられる天井部外面に行く回転ヘラケズリが荒く雑なものとなり、なかには少数ではあるが回転を利用しないヘラケズリを行う場合もあるからである。

金属器写しの埴・蓋に関しては、埴は直線的で装飾的要素はみられなくなり、蓋は口縁部を直截する器形が多く、つまみの部分の多様化が著しい。

高坏は、口縁部を折り返すものと、口縁部を折り返さないで、端部を直截するものとがみられる。前者は脚部に透孔を穿孔しないが、後者は脚部の3方に長方形の透孔を穿孔する。両者はともに坏部が平らに近くなり、脚部の長さもそれ以前に較べて長くなる傾向がある。

盤は、台部を有する器形と、高台を有する器形とがある。前者の場合、多くは口縁部を折り返さないで端部を直截し、上下につまみだすように鋭い調整を加えたものとそうでないものがある。そして台部に様々な形態の透孔を穿孔して、さらにその間にヘラ描文様を施している。また、口縁部を折り返す器形もみられるが、その場合台部には透孔やヘラ描文は施されないようである。

後者の場合は、第3小期前半と大きな差異はみられないが、法量による器形の分化と、高い高台を有する器形の出現が特徴としてあげられよう。

台付長頸瓶は、良好な資料が少ない。ただ胴部に注口部を貼り付けた器形は、一見隠ではないかと思わせるが、全体の形態をみるかぎり、台付長頸瓶に分類されるべきものと思われる。

長頸瓶は、それ以前のものに較べて胴部の張りが弱くなり、最大径も胴部の中央に移るようになる。

鉢では、高台を有する中型の片口鉢が出現するが、第3小期前半でみられた片口鉢との関係は不明である。

V期

美濃須衛古窯跡群における須恵器生産の最後の時期である。しかしこの時期に関する具体的な様相については、まだよくわかっていない。特に後半以降に属する資料が不足しており、須恵器の終末段階と灰釉陶器の出現する時期との関係など重要な問題を含んでいる。

現在の段階で言えることは、IV期第3小期にみられた美濃須衛古窯跡群の安定性がV期に入

って崩れ始め、それに対応するかのように急激に窯数の減少、および分布地域の縮小傾向がうかがえることである。

現在のところV期に属する窯跡には、稲田山古窯跡群（第1～3号窯）のみが確認されているにすぎないし、その分布地域をみても須衛地区の東部に限られている。そして今後の分布調査の成果を待っても、この傾向が著しく修正されるとは現状では考えられないのである。

ここではV期を第1小期、第2小期の2小期に区分し、第1小期をさらに前半、後半に細分して解説を行う。

第1小期前半には稲田山古窯跡群第1号窯を基準資料とし、第1小期後半は、同古窯跡群第2号窯を基準資料とする。そして第2小期は、同古窯跡群第3号窯を基準資料とする。

V期 第1小期

この時期はIV期第3小期後半にみられた須恵器の器形的多様性、装飾性が消え去って、それ以前の段階に戻ったような印象を受ける。しかし、この時期には埴・皿という新しい器種の出現があり、従来の須恵器にみられた器種が停滞するなかで独自の発展性がみられる。

第1小期 前半

坏身には無台坏身と有台坏身がある。無台坏身は形態により2種類に大別することができる。ひとつはIV期第3小期から連続する器形で、もうひとつは前者に比べて口径が大きいために、相対的により身が浅くなった印象を受ける器形である。数量的には前者が後者を圧倒しているが、後者の無台坏身の出現がこの時期をIV期から区分する要因のひとつにあげられる。

有台坏身には、前期との変化はほとんどみられない。

坏蓋は、IV期第3小期後半で盛行した口縁端部を直載する器形はみられなくなり、それ以前の口縁部を折り返す器形が大部分を占める。

双耳坏はこの時期にも引き続きみられる。

埴は、この時期に出現し、身の浅い無台坏身とともにIV期からV期を区分する根拠となったものである。

器形的には埴と皿の2種類に大別される。底部は丸味をおびて、序々に体部へと移行する。口縁部は丸くおさめるものと、外反するものとがみられる。高台は貼り付けで角ばった鋭い整形のものが多くみられる。底部外面には回転ナデ調整を行う。

その他金属器を写した埴もみられる。

高坏は、口縁部を折り返す器形はみられない。端部を直載する器形は、やや小型となって特に坏部の径が縮小している。脚部には3方に長方形の透孔を穿孔するものや、へら描による沈線を2方に配し、透孔を1か所に施すものがみられる。

盤は、台部を有する器形では台部のへら描文様が消失して、透孔を施さないものもみられる。口縁部を折り返す器形は、高坏の場合と同様にみられない。高台を有する盤には特に大きな変化はないが、高い高台を有する器形は、消滅しているようである。

鉢は、高台を有する鉢がさらに小型となる。

第1小期 後半

坏身は、無台坏身と有台坏身とがあり、無台坏身は第1小期前半で出現した身の浅い口径の大きい器形が多くみられる。有台坏身には、大型の器形がみられなくなり、この段階に限られるかもしれないが、新しく小型で身の深い器形が出現している。

坏蓋は、基本的に変化はないが、やはり小型の器形で口縁部を直截し端部を上下につまみだした鋭い整形の器形がみられる。また、つまみを有しない器形もみられる。

双耳坏はこの段階をもって消滅するようである。

碗・皿は、第1小期前半に較べて底部が平らになり、体部は直線的にたちあがって端部で外反する器形が多くなる。高台はほとんど角ばって鋭い整形である。

金属器を写した塊は、鋭さがみられなくなり、おそらくこの時期で消滅するのであろう。

高坏・盤類には変化はみられない。

長頸瓶は、胴部が丸味をもって中位で最大に張り出す。口頸部はやや短くなり、端部は断面三角形を呈する。

第2小期

Ⅳ期第3小期的な色彩はまったく消滅して、Ⅴ期第1小期に出現した塊・皿類を中心とするⅤ期的色彩が一層鮮明になる時期である。

坏身には無台坏身と有台坏身とがある。無台坏身は身が浅く口径の大きい器形に変化はないが、Ⅳ期第3小期以来の無台坏身にふたたび身の深い器形が出現している。しかし、体部に張りがみられるところに前期との変化がうかがわれる。有台坏身は高台がより中央部に近づき、整形も雑なものとなっている。

坏蓋は有台坏身と同様に整形の粗雑化が著しい。

碗・皿は、第1小期後半より大型の器形となり、器肉も薄く仕上げられている。体部にはロクロ痕が顕著であり、底部外面に回転ヘラケズリを行う。

盤は、高台を有する器形があるが、全体的に小型で整形の粗雑化が著しい。

美濃須衛古窯跡群では、以上のⅤ期第2小期をもって現在の段階では須恵器生産が終了するものと考えられる。そして須恵器のあとを受けて、当地域で生産が活発となるのは灰釉陶器である。

灰釉陶器については別に機会を改めて述べてみたいと考えているので、次の項で須恵器生産の終了年代を考えるうえでの若干の問題について述べるにとどめておくことにする。

3 まとめ

ここでは編年で設定した各期の年代的な位置づけを述べてまとめにかえたい。

各期の年代については、現在の段階では美濃須衛古窯跡群独自でそれを推定する資料は存在しない。そこで主に土器の実年代を研究するうえで、現在最も着実な成果をあげている飛鳥・藤原宮、および平城宮などの遺跡より出土した須恵器と対比させ、そこで与えられている実年代を美濃須衛古窯跡群の各期の年代を推定する手がかりとしたい。

須衛65号窯を基準資料としたⅢ期前半については、飛鳥・藤原宮の発掘調査において、7世紀初頭に位置づけられている小墾田宮推定地の溝S D050から、蓋の内面にかえりを有する蓋環と、環身に蓋受けと口縁部のたちあがり^(註4)を有する蓋環とが共伴して出土している。しかし、須衛65号窯出土の、環身に蓋受けと口縁部のたちあがり^(註4)を有する蓋環と、溝S D050から出土した同種の蓋環とを比較した場合、溝S D050から出土した環蓋の口縁端部は内側に傾斜しており、器形も大型であることから、須衛65号窯出土の蓋環より古い様相がうかがえるのである。むしろ坂田寺跡の池S G100から出土した蓋環に、より須衛65号窯に類似した特徴を見いだすことができる。それは環蓋の口縁端部が丸味をおびたものであること、器形が口径10cm前後と小型化の傾向がみられるこのなどである。そこで須衛65号窯の年代の一端を、坂田寺の池S G100に与えられた年代(飛鳥第Ⅱ期)7世紀第2四半世紀に対応するものと考えたい。しかしながらここでひとつの問題がある。それは美濃須衛古窯跡群の北方8kmに位置する美濃市丸山古窯跡群からの出土須恵器が、須衛65号窯に近い内容を持つことである。丸山古窯跡群の成立年代に関しては、榎崎彰一氏によって白鳳時代に造営されたとされる関市弥勒寺跡出土の瓦と同一の瓦が出土したことにより、丸山古窯跡群は弥勒寺の造営と深いかわりを持った窯跡とされ、弥勒寺の造営がほぼ天武朝に推定されることから、丸山古窯跡群の年代についても672年以降に比定されている。^(註6)

ここではこれ以上論を進める資料をもたないため、一応須衛65号窯を含む美濃須衛古窯跡群のⅢ期前半を、上限が7世紀第2四半世紀、下限が7世紀第3四半世紀としてとらえておきたい。そして蘇原6号窯を基準資料とするⅡ期後半については、蓋環が大型であること、しかし環蓋の口縁端部内側に傾斜面がみられないことから、Ⅲ期前半をそれほどさかのほらない時期、7世紀初頭をその上限と推定しておく。

尾崎大平第2・1号窯を基準資料としたⅢ期後半は、第2号窯より新しい第1号窯に、依然蓋の内面にかえりを有する環蓋が存在する反面、口縁部を折り返す環蓋や、高環に新器形が出現するというⅣ期への過渡期的性格がみられる。ところで飛鳥・藤原宮のⅤ期には、蓋の内面にかえりを有する環蓋はみられないとすれば、Ⅲ期後半の下限は7世紀末に比定することができる。^(註7)

地獄洞古窯跡・老洞古窯跡群1・2号窯を基準資料としたⅣ期第1小期は、この時期に出現する大型無台環身が、飛鳥Ⅴ期に盛行する環AⅣと形態・法量が類似している。また、平城宮では、平城宮Ⅰの環身法量の分布形態と、Ⅳ期第1小期の環身法量の数値とがほとんど一致している。^(註8)^(註9)^(註10)そこから第1小期開始の上限を8世紀初頭に推定することができる。それでは第1小期の終了年代についてはどうであろうか。第1小期後半として位置づけた老洞古窯跡群1・2号窯の年代観については、すでに同報告書において詳細な考察が行われている。^(註11)それによると「老洞1号窯小期を8世紀第1四半世紀の後半に、そして老洞2号窯小期を一応8世紀の第2四半世紀に考えておきたい」とされ、しかし「8世紀の第2四半世紀とした老洞2号窯小期もそのものに老洞1号窯小期とあまり差が認められないところからすれば年代的なズレを考へなくてもよいかもしい」と結論づけられている。ここでは老洞古窯跡群1号窯と2号窯との

の間には、それほどの「年代的なズレ」はないとの考えをとりたいと思う。それは次のⅣ期第2小期の開始年代に深く関わっているからである。

稲田山古窯跡群第15・14号窯を基準資料としたⅣ期第2小期の開始年代については、それを推定する資料に平城宮の溝S D 126から出土した高環(註13)がある。この高環の形態の特徴は、稲田山古窯跡群第15号窯出土の高環(註14)と強い類似性がみられる。

この高環を出土した溝S D 126は、平城第Ⅰ期から第Ⅱ期-Ⅰ期まで存続していたとされ、実年代では708年から744年までの間に比定されている。

また、平城宮において須恵器坏身の法量による分化が顕著となるのは平城宮Ⅱの段階からであり、それは美濃須衛古窯跡群ではⅣ期第2小期にみられる傾向と一致するのである。(註15)(註16)

平城宮Ⅱの実年代に関しては、725年を中心とした年代が与えられている。

以上のことから、Ⅳ期第2小期の開始年代の上限を、ほぼ8世紀第2四半世紀初頭に置くことが可能であり、必然的に第1小期の終了年代を8世紀第1四半世紀末まで引きあげて考えなければならないと思われる。

次にⅣ期第2小期の終了年代について考えてみたいが、Ⅳ期第2小期の終了年代は、やはり次の第3小期の開始年代と関わっているので、Ⅳ期第3小期の開始年代を推定することによりⅣ期第2小期の終了年代をそれに近いものと位置づけたい。

稲田山古窯跡群第12・13号窯を基準資料とするⅣ期第3小期の開始年代については、平城宮の建物S B 143の掘立柱抜取穴から出土した長頸瓶(註17)がそれを推定する参考となる。

この資料については、すでに猿投山西南麓古窯跡群の鳴海32号窯式の年代推定に用いられているが、口頸部が短かく、胴部が肩で強く丸味をおびて張り出す器形は、美濃須衛古窯跡群におけるⅣ期第2小期から、Ⅳ期第3小期前半に属する長頸瓶の特徴と一致している。(註18)そこで、S B 143の年代として与えられている平城第Ⅱ期-2～3期の年代は、美濃須衛古窯跡群のⅣ期第3小期後半の開始年代の上限を表わしていると考えてもよいと思われる。

平城第Ⅱ期-2～3期の実年代は、745年から784年までに推定されている。そしてこの長頸瓶が掘立柱抜取穴から出土したことを考え合わせれば、この長頸瓶の年代をほぼ8世紀第3四半世紀に求めることができる。

よって美濃須衛古窯跡群のⅣ期第3小期後半の開始年代の上限は8世紀第4四半世紀初頭頃に推定することが可能であり、Ⅳ期第2小期とⅣ期第3小期前半に属する長頸瓶には形態差がほとんどみられないことから、Ⅳ期第3小期の開始年代を8世紀第3四半世紀までさかのぼらせることも不可能ではないと思われる。ではⅣ期第3小期の終了年代についてはどうであろうか。それについては具体的に對比させて検討を行うだけの資料が現段階では見あたらない。やはりここでは次のⅤ期の開始年代を考えることにより相対的な位置づけを行うことにする。

稲田山古窯跡群第1～3号窯を基準資料としたⅤ期については、Ⅳ期第2・3小期と比較してやや問題がある。それは、Ⅳ期第2・3小期の基準資料とした稲田山古窯跡群第15・14・12・13号の各窯が、稲田山古窯跡群の第2地点に所在し、灰層や遺構の新旧関係から時間的にみてほぼ連続して構築されたと考えられるのに対し、Ⅴ期とした第1～3号窯については、第1